三重県埋蔵文化財調査報告278

大会（えいげ）遺跡発掘調査報告

2007（平成19）年３月

三重県埋蔵文化財センター

京焼椀（37）内面

（37）底部外面

序

三重と滋賀が背中を接する鈴鹿山地には多くの峠道があります。人々が歩いて旅をしていた時代には、この峠道は伊勢湾岸と琵琶湖岸を結ぶだけでなく、東国と京都を結ぶ動脈でもありました。大会（えいげ）遺跡が面していた「安楽越」もこのような峠道のひとつです。しかし鉄道が整備され自動車が普及すると、多くの峠道は廃れてしまいました。

今回、第二名神高速道路の建設がこの地で行われることになり、新たな峠道が開かれることになりました。これに先立って行いました大会遺跡の発掘調査では、南北朝時代から室町時代の屋敷地を確認することができました。この屋敷地に住んでいた人々は、安楽越の道を眼下に眺めながら、道を行き交う人々の様子を見、その息吹を感じていたはずです。

大会遺跡は、道路建設により姿を消しますが、この発掘調査の成果が、豊かで厚みのある中世史や当時の地域史把握のための一助となり、資料の活用を通して、文字通り人々の大きな出会いの場となれば幸いです。

平成19年３月31日

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　言

1　本書は、三重県亀山市両尾町に所在する大会（えいげ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線亀山東～滋賀県境建設事業にともなうもので、調査にかかる費用は日本道路公団中部支社（現：中日本高速道路株式会社）が負担した。

3　発掘調査は、以下の体制により実施した。

・調査主体：三重県教育委員会

・調査担当：三重県埋蔵文化財センター

調査第二課

主幹兼課長　　吉水康夫

第一係長　　森川幸雄

第四係技師　　穂積裕昌

・調査作業委託：　株式会社リメックス

4　報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センターが以下の体制で行った。

平成17年度

調査研究Ⅱグループ

グループリーダー　河北秀実

主査　　竹田憲治

技師　　角正淳子

臨時技術補助員　　酒井巳紀子

経理担当　総務グループ　主事　　金森　功

平成18年度

調査研究Ⅱ課

課長　　田村陽一

主事　　前野謙一

経理担当　総務課　主事　　金森　功

5　本書の編集は竹田・前野が行った。各部の執筆者は目次および本文末尾に記した。

6　本書に掲載した遺構写真の撮影は、調査担当者及び調査作業受託機関が行い、遺物写真の撮影は竹田・前野が行った。

7　本報告書作成にあたっては、以下の方々及び機関から御助言・指導を得ることができた。

尾野善裕、亀山隆、中野晴久、藤澤良祐、堀木真美子、教安寺、慈眼寺

8　図版における方位は、国土調査法による第Ⅵ系座標を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。なお磁北方位は、西偏６°50′、真北方位は、西偏０°18′である。

9　本書で使用した土色・胎土の色調は、小山・竹原編『新版標準色帳』（９版1989年）による。

10　本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。

ＳＡ：柵・柱列　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸

ＳＫ：土坑　　ＳＸ：墓・火葬穴

11　当発掘調査による図面・写真等の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

12　調査にあたっては、三重県企業庁・同北勢水道事務所・亀山市教育委員会・両尾地区自治会ならびに地元各位の協力を得た。

本　文　目　次

Ⅰ　前言……（森川・竹田）……1
　1　近畿自動車道名古屋神戸線の概要
　2　発掘調査に至る経過と体制
　3　発掘調査

Ⅱ　位置と歴史的環境……（竹田）……6

Ⅲ　遺構……（前野）……8
　1　堀立柱建物
　2　柱列
　3　土坑
　4　火葬穴
　5　溝
　6　井戸

Ⅳ　遺物……（竹田）……29
　1　中世以前の遺物
　2　中世以降の遺物

Ⅴ　結語……（竹田・前野）……33
　1　遺構の変遷
　2　大会遺跡の中世集落
　3　中世陶器の搬入状況
　4　総括

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図①（1：50,000）……2
第２図　遺跡周辺地形（1：5,000）……3
第３図　調査区位置図（1：2,000）……3
第４図　調査区地割図（1：1,000）……4
第５図　遺跡位置図②（1：50,000）……7
第６図　遺構実測図①（1：500）……9
第７図　遺構実測図②（1：500）……10
第８図　ＳＢ170・171・173（1：100）……11
第９図　ＳＢ172・174・175・177（1：100）…12
第10図　ＳＢ176・178（1：100）……13
第11図　ＳＢ179・182・183・184（1：100）…15
第12図　ＳＢ185・188（1：100）……16
第13図　ＳＢ186・187（1：100）……17
第14図　ＳＡ180・181（1：100）……18
第15図　ＳＸ5・10、ＳＫ8・9（1：20）……20
第16図　ＳＫ12・28・36（1：20）……21
第17図　ＳＫ43･46･55（1：20）・ＳＫ60（1：40）……22
第18図　ＳＫ61（1：40）・ＳＫ62（1：20）……23
第19図　ＳＤ111（平面図1：200・断面図1：40）
　　ＳＥ82（1：50）……25
第20図　出土遺物①　1・2（1：3）・3～18（1：4）……30
第21図　出土遺物②（1：4）……31
第22図　遺構変遷模式図……34
第23図　大会遺跡出土中世陶器グラフ……36
第24図　中世遺跡出土の瀬戸美濃擂鉢と
　　常滑片口鉢の割合……36

挿　表　目　次

第１表　路線内遺構一覧表 ……４
第２表　大会遺跡範囲確認調査一覧表 ……４
第３表　平成10年度発掘調査遺跡一覧表……４
第４表　遺構一覧表①……26
第５表　遺構一覧表②……27
第６表　遺構一覧表③……28
第７表　出土遺物観察表……32

図　版　目　次

巻頭図版　京焼椀（37）内面／（37）底部外面
図版１　調査前状況・Ｂ区北方　南から／
　　Ｄ区東南部表土剥ぎ　東から……39
図版２　Ｂ区全景　北東から／
　　Ｂ区全景　北から……40
図版３　Ｃ区東部全景　東から／
　　Ｃ区東部全景　北から……41
図版４　Ｄ区全景　北西から／
　　Ｄ区北西部全景　南西から……42
図版５　Ｄ区西南部　北東から／
　　Ｃ区北東部　南から……43
図版６　Ｃ区南東部Ｄ区南西部遺構群　西から／
　　Ｄ区西南部　北西から……44
図版７　ＳＢ170　南東から／
　　ＳＢ171　東から ……45
図版８　ＳＢ172　東から／
　　ＳＢ184・ＳＢ185　西から ……46
図版９　ＳＢ177・ＳＢ179　南西から／
　　ＳＢ177・ＳＢ179　西から ……47
図版10　現在の大会遺跡　南東から／
　　現地説明会風景……48
図版11　出土遺物①……49
図版12　出土遺物②……50

Ⅰ　前言

1　近畿自動車道名古屋神戸線の概要

東名・名神高速道路は、我が国の基幹交通を担う大動脈として産業・文化・経済活動に大きな貢献を果たしてきた。しかし、供用開始後20年余を経過した現在、ほぼ前線にわたり混雑が著しく、本来の高速性・定時性が低下しつつある。このままでは、量的増大に加え、多様化する将来の交通需要に対応することが困難であると予想されている。

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）は、第二東名高速道路と共に、これらの問題に対応し、既存の東名・名神高速道路と一体となって、四全総で提唱されている交流ネットワーク構想を推進するための高規格道路網の根幹となるものである。

第二名神高速道路については、昭和62年６月四全総の高規格幹線道路として位置づけられ、９月には名古屋市～神戸市170㎞が予定路線に編入された。平成元年２月には愛知県海部郡飛島村～神戸市165㎞について基本計画が決定され、平成３年12月には飛島村（愛知県）～四日市市19㎞、亀山市～城陽市（京都府）68㎞の整備計画策定、同月に日本道路公団に調査指示が出された。その後、平成５年11月には、上記区間について、近畿自動車道飛島神戸線（第二名神）として建設大臣から道路公団に施工命令が出された。なお、路線名は平成８年８月に近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）と改称された。

現在、三重県内では愛知県境～四日市ＪＣＴまでと亀山東ＪＣＴ～滋賀県境までの２区間が事業化され、建設工事が進行している。この内、愛知県境～四日市ＪＣＴの区間についてはすでに平成９年度から事業地内の埋蔵文化財発掘調査が実施されており、本書で報告する亀山東ＪＣＴ～滋賀県境の区間についても平成10年度から事業地内の埋蔵文化財発掘調査が実施されることとなった。その経路は、亀山市の北東部近畿自動車道名古屋関線（東名阪自動車道）との交差地点である亀山東ＪＣＴから、亀山市の北部安楽川北岸を通り亀山ＪＣＴを経て安楽峠を越え滋賀県境に至るもので、延長9.1㎞である。

2　発掘調査に至る経過と体制

当該区間内の埋蔵文化財分布調査は平成４年12月に亀山東ＪＣＴ～亀山ＪＣＴ間について実施され、野元坂館跡及び落山城跡の２遺跡を確認した。平成５年12月には亀山ＪＣＴ～滋賀県境間の分布調査を実施したが該当遺跡はなかった。また、平成７年11月には工事用道路についての分布調査を実施したが該当遺跡はなかった。しかし、上記の分布調査はいずれも現地の幅杭等が無い状況で、１／2,500平面図をもとに実施したものであり、平成９年６月に幅杭打設後、１／1,000平面図による再分布調査を実施することを道路公団と三重県埋蔵文化財センターの間で確認した。これを受けて平成10年１月に実施した再分布調査の結果、新たに網中遺跡・大増遺跡・大会遺跡の３遺跡が追加確認され、合計５遺跡について平成10年２月に『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）亀山東ＪＣＴ～滋賀県境建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅱ』で報告した。該当する５遺跡はいずれも現状保存が困難であり、発掘調査による記録保存をはかることとなった。

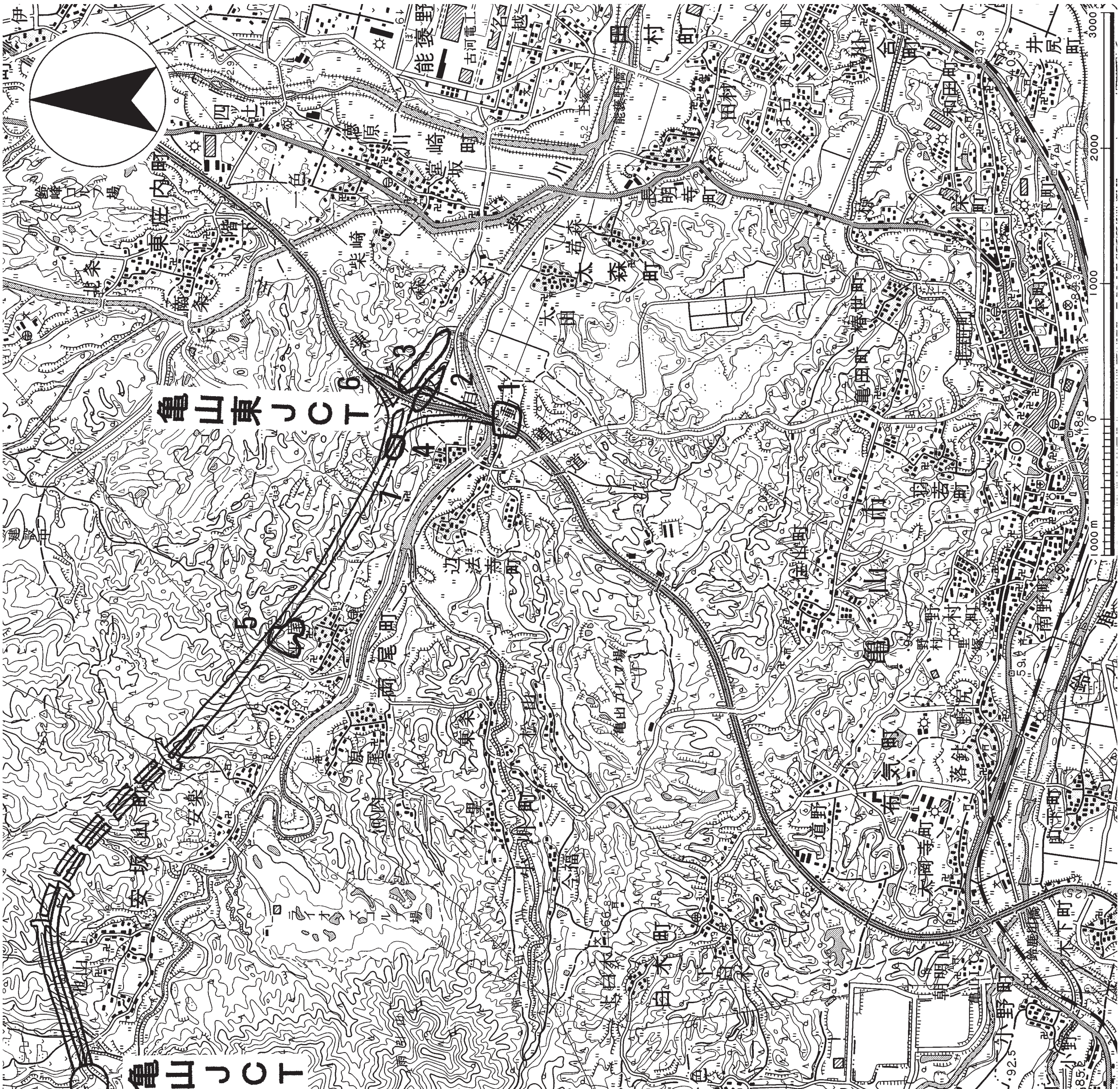
調査体制については、当初、道路公団事業についても建設省事業と同様の三重県・道路公団・（社）中部建設協会による三者体制を提示したが、道路公団の契約体系上の問題及び道路公団・県土木部関係事業が急増する中で県教育委員会定数問題から事業量に対応する人員配達が困難な状況となり、様々な方策を協議検討の結果、県埋蔵文化財センターの調査体制に組み込む形で、発掘調査作業に民間調査機関を導入することとなった。この調査体制については、既に愛知県境～四日市ＪＣＴの区間で平成９年度から導入されているところである。

また、発掘調査の迅速化をはかるため、平成11年度から、当事業にかかる発掘調査を亀山市教育委員会でも行った。それぞれの状況については第１表に示す。

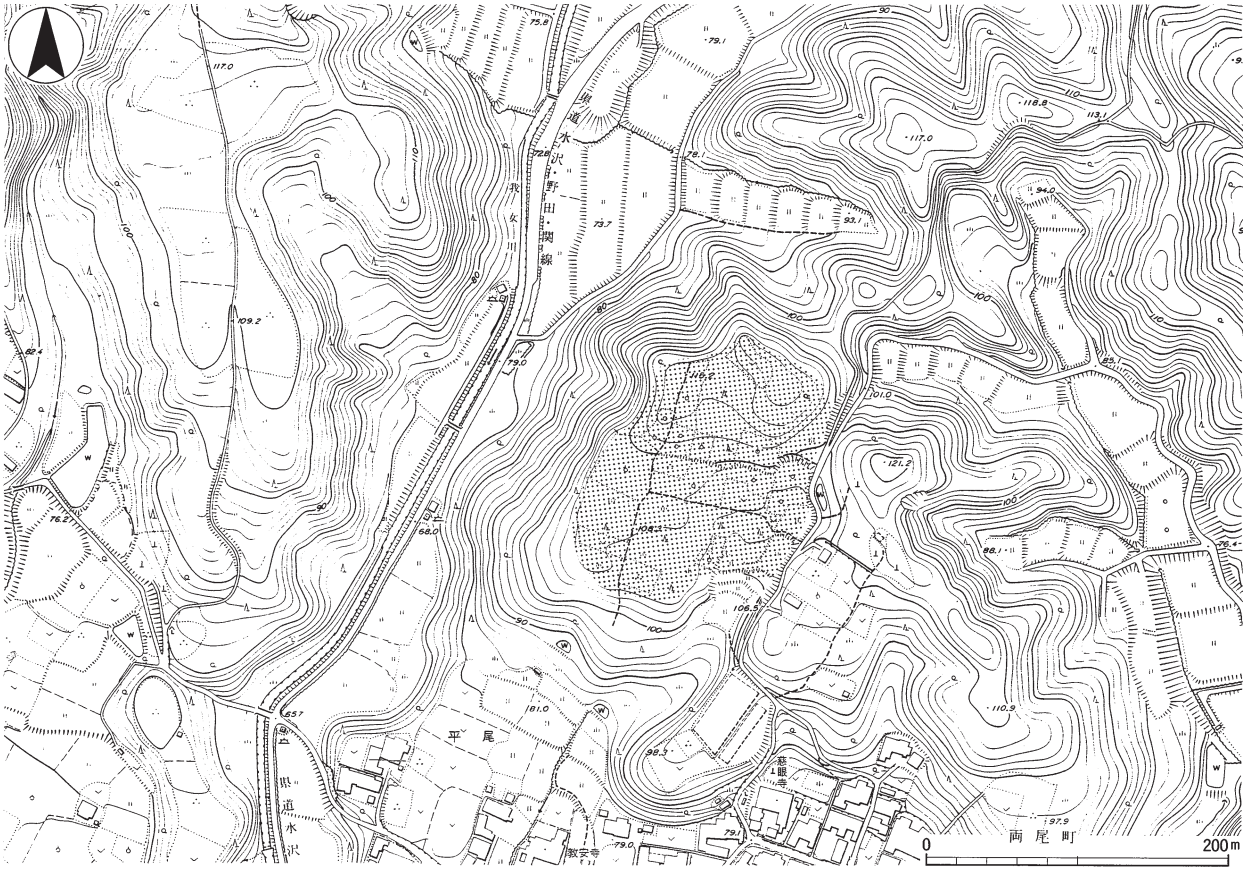
3　発掘調査

(1) 範囲確認調査・発掘調査

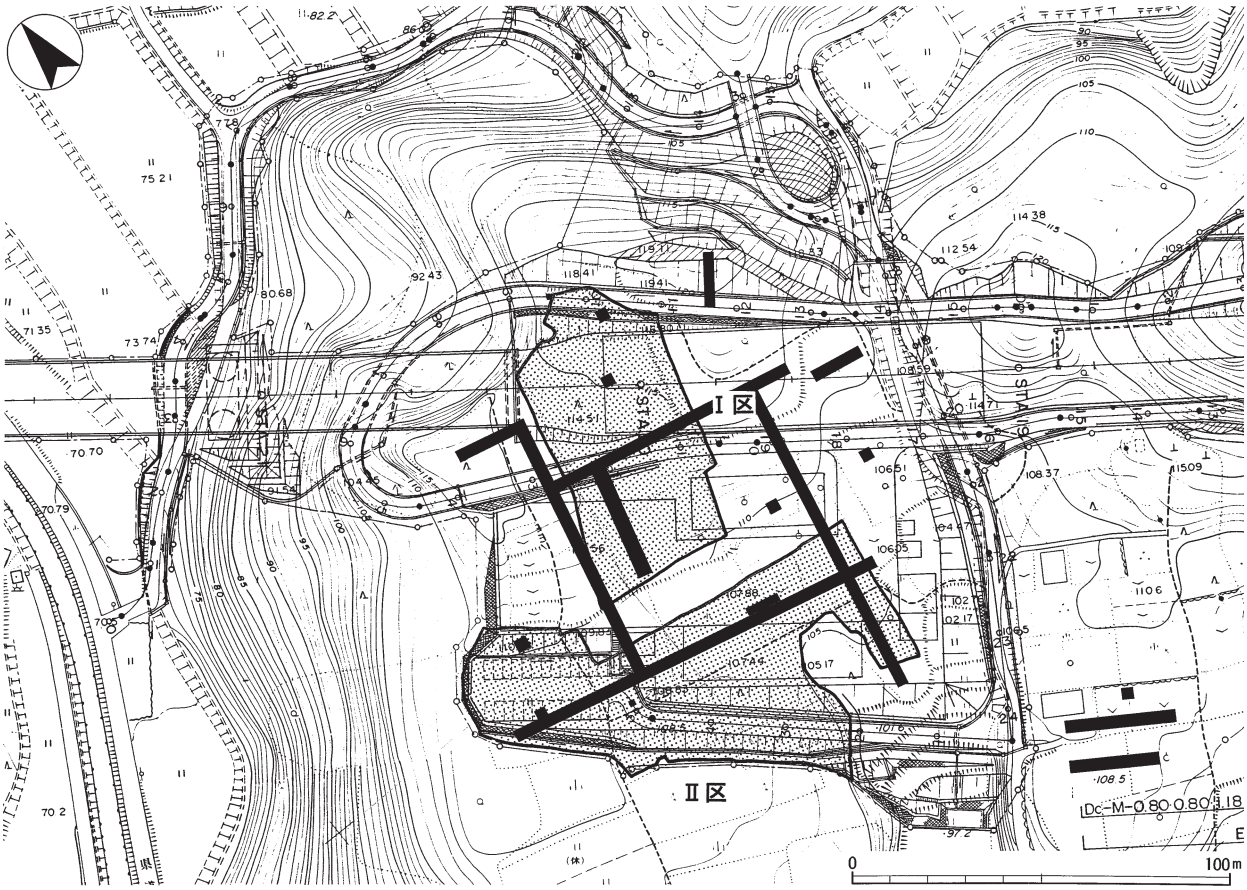
平成10年度は、日本道路公団事業として第二名神愛知県境～四日市ＪＣＴに加えて、新たに当該事業



第１図　遺跡位置図①（1：50,000）〔国土地理院　1：50,000亀山〕



第２図　遺跡周辺地形（1：5,000）



第３図　調査区位置図（1：2,000）

No	遺跡名	所在地	種 別	時 代	事業地内遺跡面積(㎡)		平成10年度調査	備　　考
					対象面積	発掘調査面積		
1	野元坂舘跡	亀山市辺法寺町青木	城館跡	室町	75	市 285		昭和44年東名阪建設に伴い一部調査。
2	網中遺跡	亀山市辺法寺町網中	遺物包蔵地	中世	6,400	市 7,137		土師器・山茶椀など散布。下層含む。
3	落山城跡	亀山市辺法寺町網中	城館跡	室町	2,100	市 600		土塁・井戸・帯郭状平坦面有。
4	大増遺跡	亀山市辺法寺町大増	城館跡	中世	6,500	0		石垣が「コ」字状に幾重にも広がる。
5	大会遺跡	亀山市両尾町大会	集落跡	中・近世	17,750	県 6,804	範 932　6,804	平成10年度現地調査完了。
6	北山遺跡	亀山市太森町北山		中世		市 2,215		平坦面有。「北山城跡」
7	城館推定地B	亀山市辺法寺町網中				市 301.5		遺跡とは判断できない。
合　　計			7遺跡		32,825	17,342.5	6,804	

第１表　路線内遺構一覧表

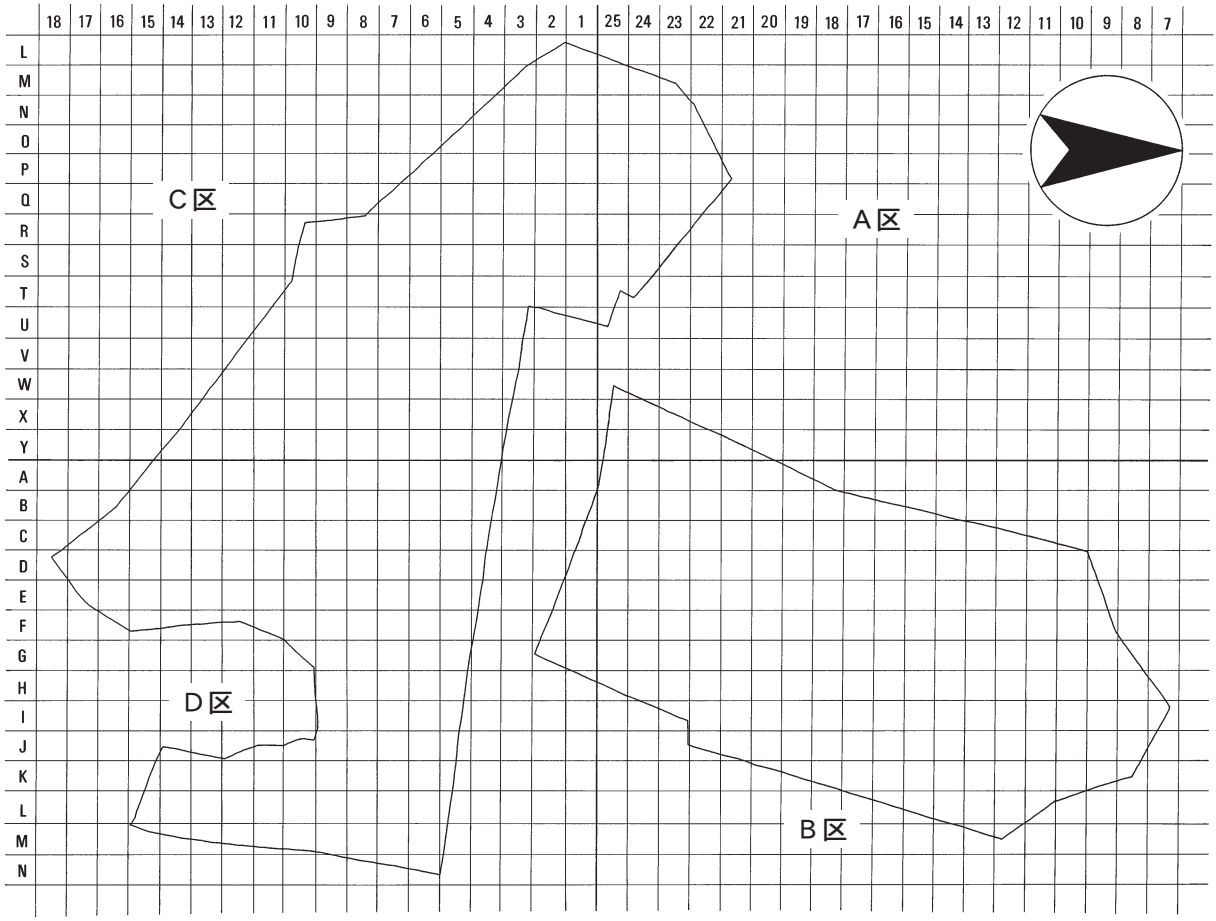
範囲確認調査、市は亀山市教育委員会、県は三重県埋蔵文化財センター調査

No	遺跡名	調査面積(㎡)	対象面積(㎡)	要本調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考
5	大会遺跡	932	17,750	6,804	平成10年4月7日 ～10年5月6日	山本義浩・田中久生・服部芳人 水橋公恵・川瀬　聡・田中美穂	道路公団側が 土工部門提供

第２表　大会遺跡範囲確認調査一覧表

No	遺跡名	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者	調査作業受託機関	契約期間	備　　考
5	大会遺跡	6,804	平成10年8月3日 ～10年12月9日	穂積裕昌	ﾘﾒｯｸｽ 株式会社	平成10年7月2日 ～11年1月29日	11月1日　現地説明会　150名参加

第３表　平成10年度発掘調査遺跡一覧表



第４図　調査区地割図（1：1,000）

の第二名神亀山東ＪＣＴ～滋賀県境、および近畿自動車道名古屋関線亀山～亀山、同自動車道尾鷲勢和線紀勢～勢和にかかる埋蔵文化財の発掘調査も実施することとなったため、これら３路線４区間の発掘調査について、日本道路公団名古屋建設局（当時）と三重県の間で、平成10年度４月１日付けで委託契約を締結した。調査主体は三重県教育委員会、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。

第二名神亀山東ＪＣＴ～滋賀県境では、工事計画との関連で先述の５遺跡中大会遺跡の範囲確認調査を至急実施する必要があり、年度当初の４月７日から開始した。なお、この範囲確認調査は、開始時期の問題から民間調査機関は導入できず、道路公団側から土木部門の提供を受けて実施した。

範囲確認調査の結果、大会遺跡は6,804㎡の本調査が必要と判断され、工事工程との調査をはかる一方で民間委託の準備を進め、８月３日から現地調査を開始した。発掘調査体制については、調査作業を三重県教育委員会から委託契約により民間調査機関に委託し、県調査員の指示の下に実施する方式とした。その要点は①委託契約により民間調査機関を埋蔵文化財センターの調査体制に組み込む形とする、②県調査員は調査主担当として調査現場に常駐する、③民間調査機関からは主任技師（総括調整）、副調査員（考古学）土木測量技師（現場管理・測量）、助手及び作業員、重機などの土木部門一式の提供を受ける、④入札に係る民間調査機関の選定指名は教育委員会で行うなどであり、民間調査機関で考古部門を持つ発掘調査の支援機関として活用するものである。大会遺跡は、入札によりリメックス株式会社と委託契約を締結し、調査を実施した。

なお平成13年度には、平成10年度調査区の東側、近畿自動車道名古屋神戸線事業地内にある中平尾墓地の移転先でトレンチ２本、テストピット１ヶ所を設定した範囲確認調査を行った。しかしこの地点では発掘調査の対象となる遺構・遺物は確認されなかった。（森川幸雄）

（2）発掘調査の方法

①地区設定

発掘調査にあたっては、国土調査法の第Ⅵ系国土座標にあわせ、Ｘ＝-121700、Ｙ＝40100を基点として、遺跡全体を網羅する100×100ｍを１単位とする大地区を設定した。

さらに大地区内に４×４ｍを１単位とする小地区を設定した。各小地区は北西隅を基点として北から南には１～25の数字、西から東にはａ～ｙまでのアルファベットで表示した。

②掘削方法

表土掘削は重機（バックホー）を用い、遺構検出と遺構掘削は人力で行った。

③遺構番号の付与

土坑・溝・柱穴は、発掘調査時にそれぞれの小地区にて番号を付与した。その後、報告書作成にあたり土坑・溝・墓・掘立柱建物などは全体での通し番号を、建物としてまとまらなかった小穴は小地区ごとの通し番号を付与した。新旧の遺構一覧表は、調査成果に記載した。

④図化作業

現地の発掘調査では遺構検出直後に、遺構埋土の土色や前後関係を詳細に記録するため４ｍメッシュの小地区毎に１/40の遺構カードを作成した。調査区全体の略測図は、この遺構カードを基に１/100で作成した。

遺構掘削の終了後に、調査区全体の掘り上がり状況の平面図（１/20）を手書きで作成し、それを編集して１/50・１/100・１/200の平面図及び等高線図を作成した。

また、個別遺構詳細図や遺物出土状況図は１/10ないし１/20で、遺物出土状況図は１/10である。

⑤写真撮影

現地の発掘調査では、各遺構の検出時及び完掘状況を４×５inch判、ブローニー判、35㎜の各フィルムサイズによって撮影した。フィルムの種類は、モノクロネガ及びカラーリバーサルを使用した。

報告書作成にあたって遺物写真撮影は、４×５inch判、ブローニー判の白黒写真を撮影し、必要に応じてカラーポジ写真を撮影した。

（3）普及・公開

発掘調査期間中の平成10年11月１日に発掘調査成果の現地説明会を行った。（竹田憲治）

Ⅱ　位置と歴史的環境

鈴鹿川支流の安楽川は、鈴鹿山脈仙ヶ岳の南斜面を源に、亀山市川崎町付近で御幣川・八島川と合流する。大会遺跡（１）は安楽川左岸の標高約100mの丘陵上に立地する中世から近世の遺跡である。

遺跡の南麓には平尾の集落があり、その南には亀山城下から近江に抜ける近世「安楽越」の道が通る。各時代の遺跡の分布から見ると、中世以前の開発は、安楽川流域よりも、御幣川や八島川の流域が先行している。安楽川流域が本格的に開発されるのは、中世前期以降のことと思われる。以下、大会遺跡にかかわりが深い中世の遺跡について記述する。

交通路　安楽越は、平尾集落で小川―住山から亀山に入るルートと、安楽川を下り亀田―羽若を経て亀山に入るルートに分かれる。中世の安楽越のルートも近世のものとそれほど変わらなかったと思われるが、安楽川をもう少し下り、川崎付近で南北路（近世「巡見道」）につながる道もあったと考えられる。

集落跡　発掘調査例が少なく、集落遺跡の状況はよくわからない。しかしながら、西沖遺跡（２）、殿垣内遺跡（３）、沖屋敷遺跡（４）、東屋敷遺跡（５）、中平尾遺跡（６）、大倉遺跡（７）、下蔵遺跡（８）、天王遺跡（９）、柚之木遺跡（10）、西尾Ａ遺跡（11）、西尾Ｂ遺跡（12）、原田遺跡（13）など、山茶椀や中世の土師器が散布する遺跡が安楽越の道に沿って分布していることから、すでに中世から安楽越ルートに沿って集落が展開していた可能性が高い。

城跡　峯城跡（14）は、安楽川・八島川・御幣川が合流する地点に位置する大規模城館である。この城では天正11年（1583）の織田信孝・柴田勝家と織田信雄・羽柴秀吉の戦い（賤ヶ岳の合戦）や同12年（1584）の織田信雄・徳川家康と羽柴秀吉の戦い（小牧長久手の合戦）で両軍による激戦が行われた。

城郭研究からは、峯城跡の遺構には、戦国期まで遡る部分と、織豊期に改修された部分があると考えられている[①]。この違いから、峯城は戦国期に峯氏によって築城され、その後織豊期の大規模戦争に際して拡張・改修が行われ、天正末ごろまで存続していたと考えられている[②]。

このほかの城跡には、白木城跡（15）、小川城跡（16）、落山城跡（17）、野元坂館跡（18）、南条城跡（19）、青館跡（20）、古城跡（21）、山尾氏館跡（22）がある。これらの多くは戦国期の領主のものと考えられるが、古城跡は峯城跡以前の峯氏の根拠であった可能性、落山城跡は峯城の出城であった可能性、野元坂館跡・青館跡・古城跡・山尾氏館は虎口や土塁の形状や改修痕跡から峯城攻防戦時の付城であった可能性が指摘されている[③]。

寺院　安楽越を登った上野登寺は平安時代の創建と伝えられる寺院である。辺法寺の原田遺跡（13）からは、古瀬戸製品、土師器皿が出土しているが、この場所には、「万福寺」という寺があったとの伝承がある。

辺法寺の不動院には木造不動明王座像の残欠がある。この像はかつてこの寺の本尊であったとされるもので、平安期に遡る像である可能性がある[④]。

鈴鹿市東庄内町の吉尾道場（23）は、下野国から伊勢国に入った浄土真宗高田派の真恵が、朝明郡大矢知の光明寺、鈴鹿郡小松の中山寺とともに初期の教化の拠点とした所である。現地には土塁や堀が残存する。周囲からは土師器皿や山茶椀も採集されている[⑤]。これらの遺物は真恵が伊勢に入ったよりも古い時期のもので、それ以前の寺院があった可能性が考えられる。

墓地・石塔　鈴鹿市東庄内町の東庄内Ｂ遺跡（24）からは、周囲を方形に囲む溝を持ち、四隅に柱穴をもつ中世前期の火葬施設が確認されている[⑥]。

原尾宗徳寺（25）には平安時代末から鎌倉時代初頭の石造三重層塔がある。これは、県内にみられる層塔では最古のものとされている[⑦]。

また、安坂山町の下野登寺には室町期の宝篋印塔が、安楽寺には同じく室町期の六地蔵石幢があり[⑧]、室町期には安楽川の開発も進み、このような石造物を造立しえる有力者層が成立していたと考えられる。

生産遺跡　網中遺跡（26）では、発掘調査により中世前期から近世前期の水田跡が確認されている。発掘調査での確認は少ないが、狭隘な谷あいにも水田が広がっていたと思われる[⑨]。

社会的諸関係　大会遺跡を含む安楽川流域の安坂山

（安楽・坂本・池山）、両尾（平尾・原尾）は、中世には「安楽御厨」という荘園であったとされている。

この地域の最大勢力であったのは関氏の一族とされる峯氏である。峯氏は笠井賢治氏によれば、15世紀には古城、16世紀には峯城を居城として安楽川・八島川、御幣川流域の諸荘園へ勢力を浸透させていた。16世紀後半には、三川流域は「嶺領」と呼称され、この地域は峯氏・峯城に付随する領域と把握されていたようである。

永禄末の織田信長の侵攻により、伊勢は織田氏の勢力下に置かれることになった。峯氏も天正年間には各地を転戦し、在地性は次第に失われていく。しかし峯城とそれに付属する領域は織豊期末までは引き継がれていたようで、城館の項で触れた天正11・12年の峯城を巡る戦いも、このなかで起こる。

（竹田憲治）

〔参考文献〕

『亀山市埋蔵文化財分布地図』（亀山市教育委員1993年）

『美濃街道　濃州道　八風道　菰野道　巡見道　巡礼道　鈴鹿の峠道』（三重県教育委員会　1984年）

笠井賢治「峯氏・嶺領・峯城」『Mie history』14　2003年

飯田良一「15世紀の関氏と在地情勢」『正法寺山荘跡発掘調査報告　第四次』（関町教育委員会　1981年）

〔註〕

①高田徹「伊勢　峯城をめぐる合戦」（『別冊歴史読本　図説戦国時代の合戦』新人物往来社　1998年）

②笠井賢治「峯氏・嶺領・峯城」（『Mie history』14、2003年）

③前掲註②と同じ。

④『亀山市の仏像』亀山市教育委員会　1997年

⑤山際文則「吉尾道場跡の調査」（『伊勢の中世』85号　2002年）

⑥「東庄内Ｂ遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1970年）

⑦亀山隆「閑話二題」（『伊勢の中世』87号　2002年）

⑧前掲註⑦に同じ。

⑨亀山市教育委員会　亀山隆氏のご教示による。

第５図　遺跡位置図②（1：50,000）

Ⅲ　遺構

１　掘立柱建物

中世の掘立柱建物を17棟確認した。調査区北部に１棟、中央部に３棟、南部に８棟、谷を挟んで東部に５棟検出した。

ＳＢ１７０

建物型式：側柱建物

平面規模：桁行４間、梁行２間

建物方位：Ｎ２９°Ｗ

面積：35.1㎡

調査区の北部で検出した。柱穴から土師器皿が出土した。

ＳＢ１７１

建物型式：総柱建物

平面規模：桁行４間、梁行２間

建物方位：Ｎ３０°Ｅ

面積：55.5㎡

重複関係：ＳＢ171（中世）→ＳＫ60（近世）

調査区の中央部で検出した。ＳＢ171内北側中央部にＳＫ60が重複するが、両者の前後関係は前述の通りである。

ＳＢ１７２

建物型式：側柱建物

平面規模：桁行２間、梁行２間

建物方位：Ｎ１０°Ｅ

面積：13.2㎡

調査区の中央部で検出した。小さな建物である。建物方位はＳＢ173・ＳＢ177・ＳＢ178とほぼ同じである。

ＳＢ１７３

建物型式：側柱建物

平面規模：桁行４間、梁行１間以上

建物方位：Ｎ１０°Ｅ

面積：11.55㎡以上

調査区の中央部で検出した。SK75は建物内土坑と考えられる。建物方位はＳＢ172・ＳＢ177・ＳＢ178とほぼ同じである。

ＳＢ１７４

建物型式：総柱建物

平面規模：桁行４間、梁行２間

建物方位：Ｎ７°Ｅ

面積：30.03㎡

調査区の南西隅で検出した。柱穴から常滑製品の甕・青磁椀・南伊勢系の土師器鍋が出土した。建物方位はＳＢ187とほぼ同じである。

ＳＢ１７５

建物型式：総柱建物

平面規模：桁行４間、梁行２間

建物方位：Ｎ２０°Ｅ

面積：24.57㎡

重複関係：ＳＤ127（中世）→ＳＢ175（中世）

調査区の南部で検出した。柱穴から常滑製品の甕が出土した。建物方位はＳＢ182とほぼ同じである。

ＳＢ１７６

建物型式：総柱建物

平面規模：桁行５間、梁行３間

建物方位：Ｎ１６°Ｅ

面積：53.28㎡

調査区の南部で検出した。柱穴から土師器皿の小片が出土した。ＳＫ31・ＳＫ32と重複するが、前後関係は不明である。建物方位はＳＢ179・ＳＢ183・ＳＡ180・ＳＡ181とほぼ同じである。

ＳＢ１７７

建物型式：総柱建物

平面規模：桁行２間、梁行２間

建物方位：Ｎ１０°Ｅ

面積：14.04㎡

調査区の南部で検出した。小さな建物である。柱穴から常滑製品の甕・土師器皿の小片が出土した。建物方位はＳＢ172・ＳＢ173・ＳＢ178とほぼ同じである。

ＳＢ１７８

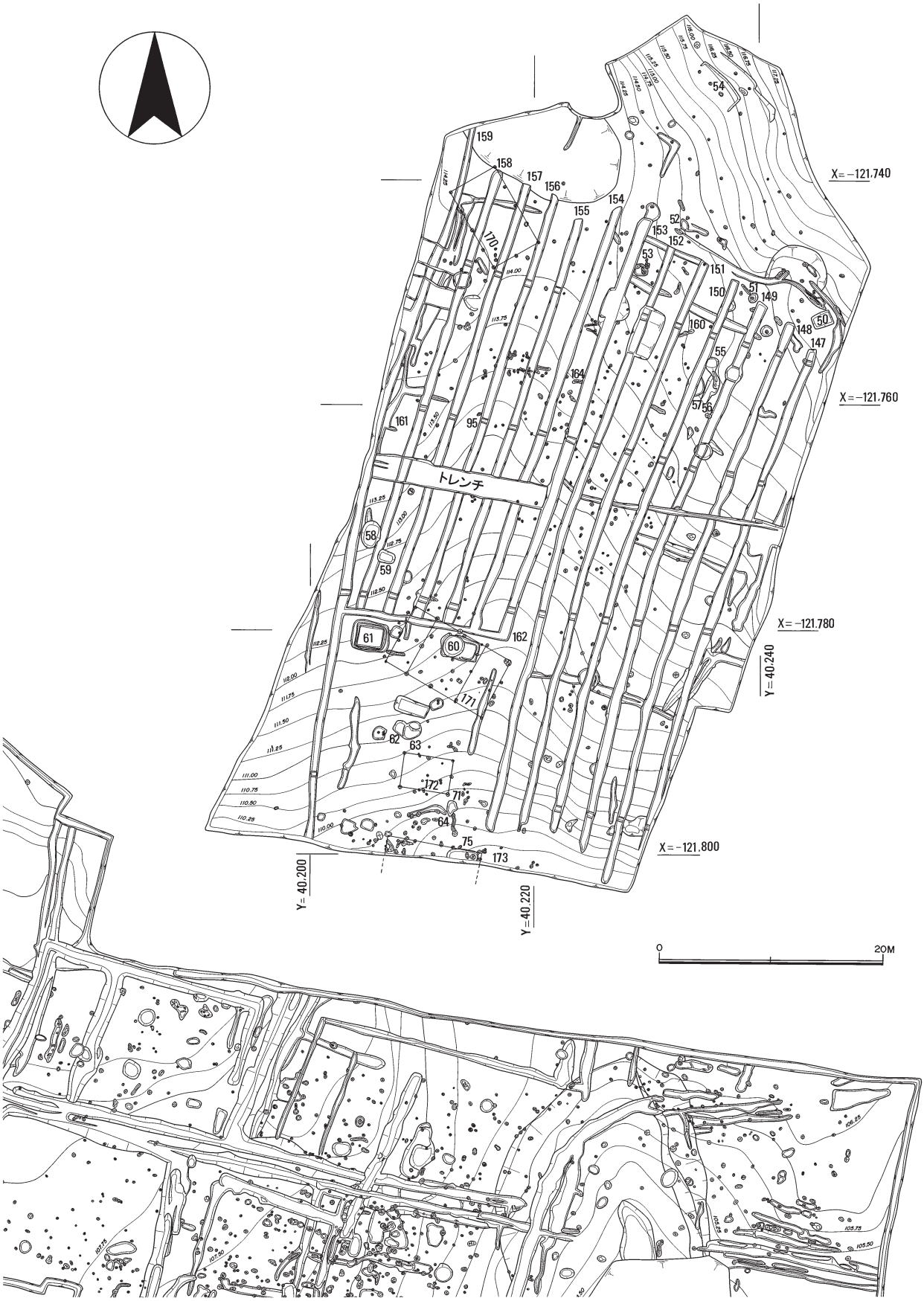
建物型式：側柱建物

平面規模：桁行６間、梁行３間

建物方位：Ｎ１０°Ｅ

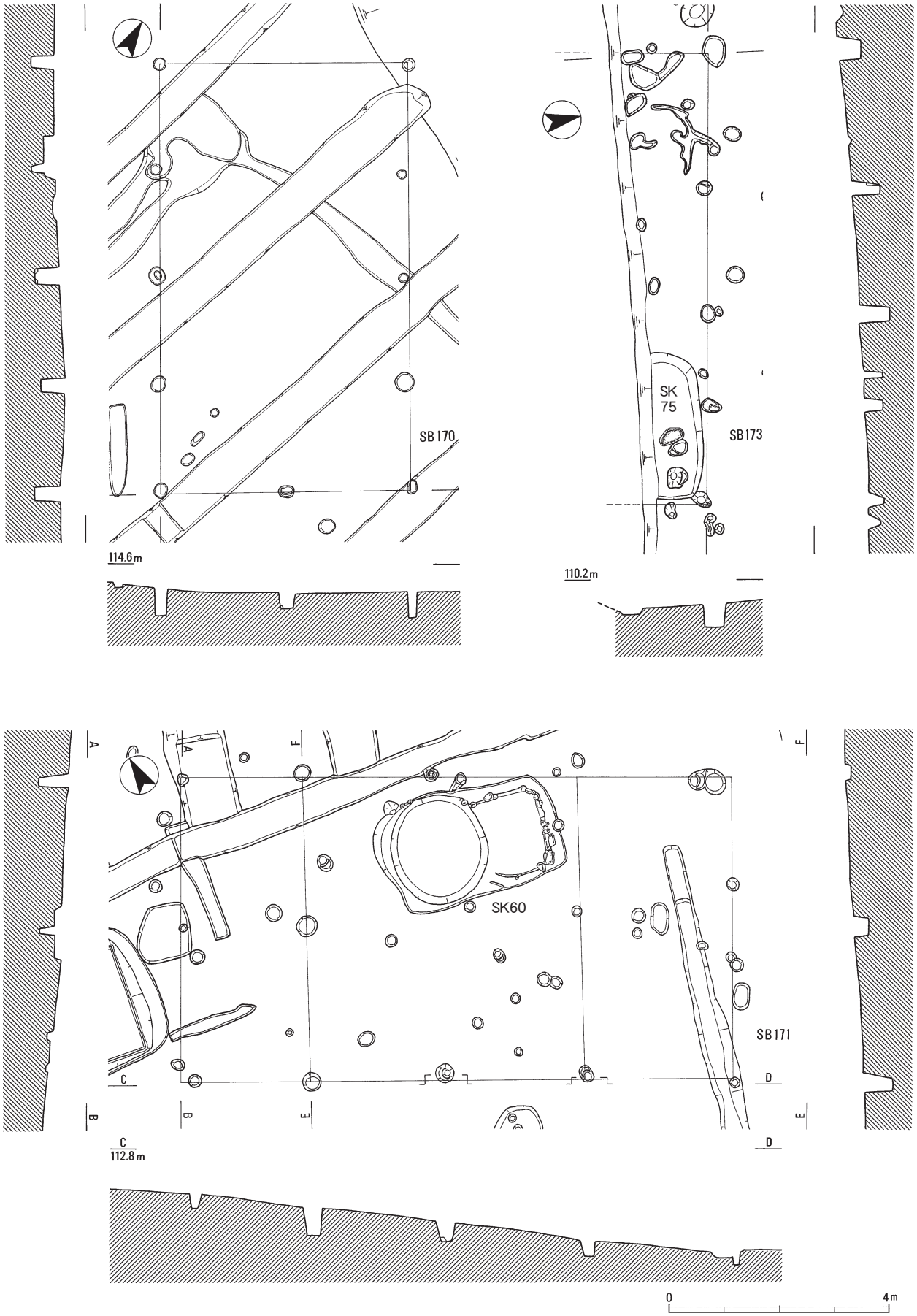
面積：66.15㎡

調査区の南部で検出した。柱穴から土師器皿の小片が出土した。建物方位はＳＢ172・ＳＢ173・ＳＢ177とほぼ同じである。

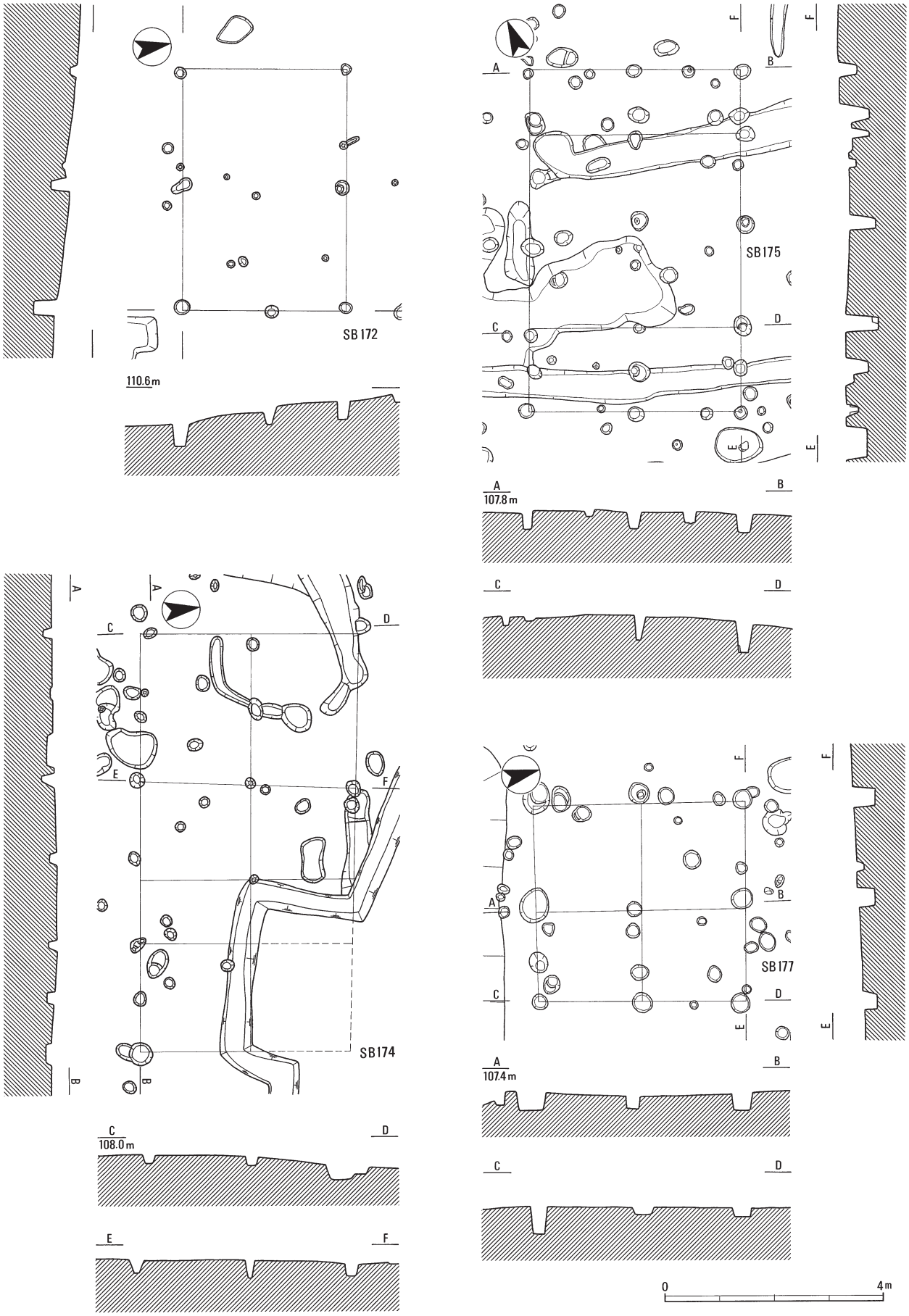


第６図　遺構実測図①（1：500）

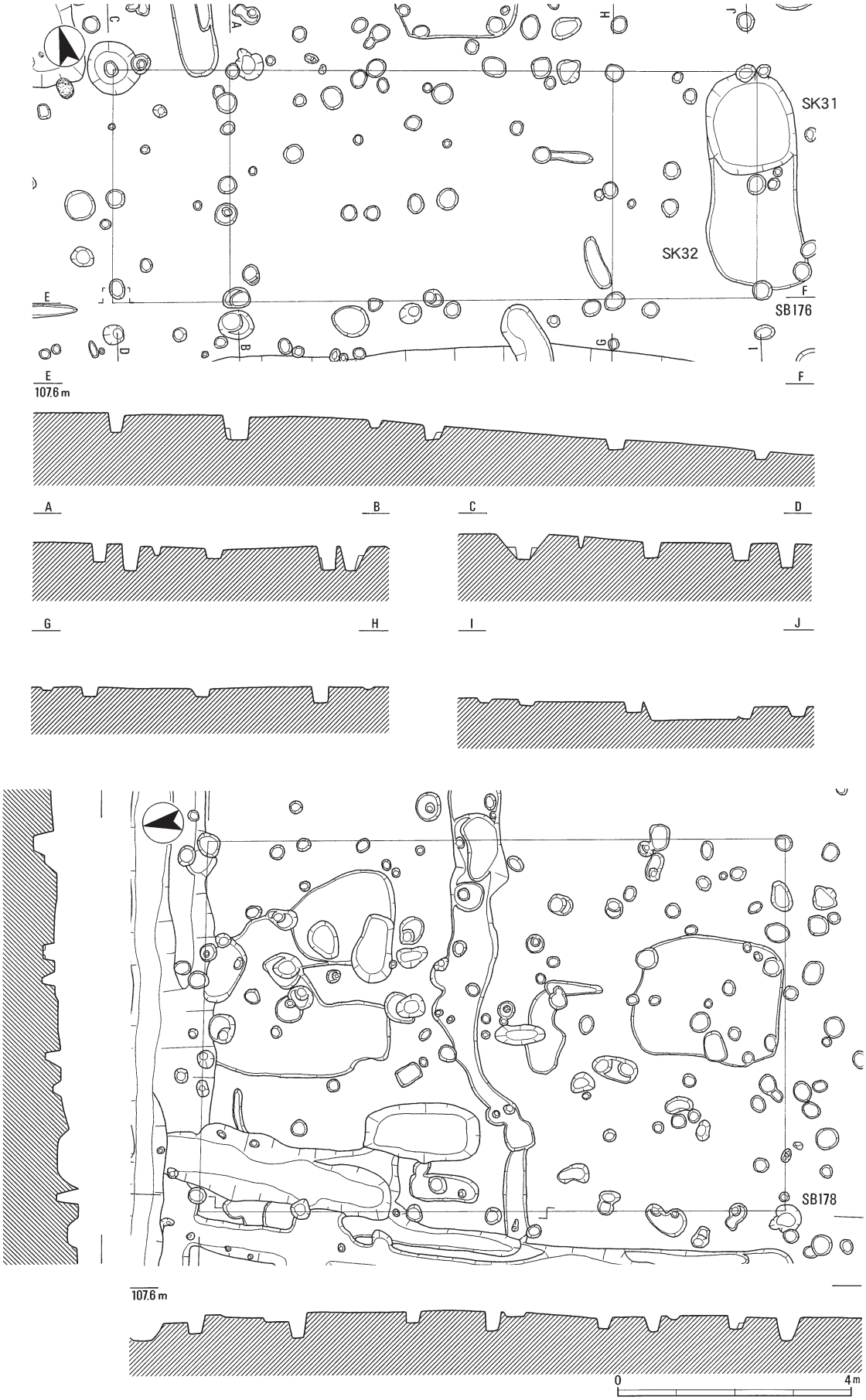
第７図　遺構実測図②（1：500）



第８図　ＳＢ170・171・173　(1：100)



第９図　ＳＢ172・174・175・177（1：100）

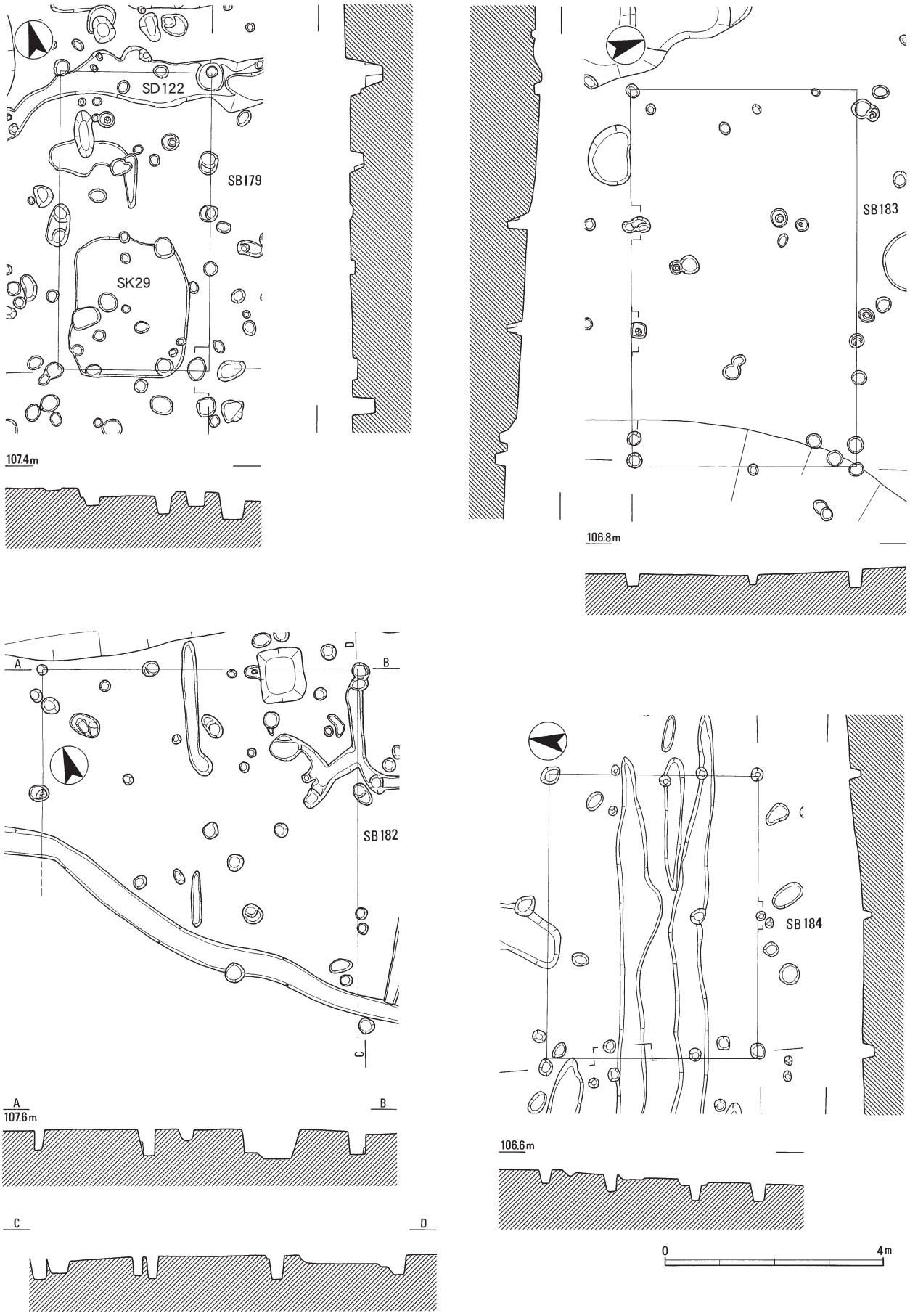


第10図　ＳＢ176・178（1：100）

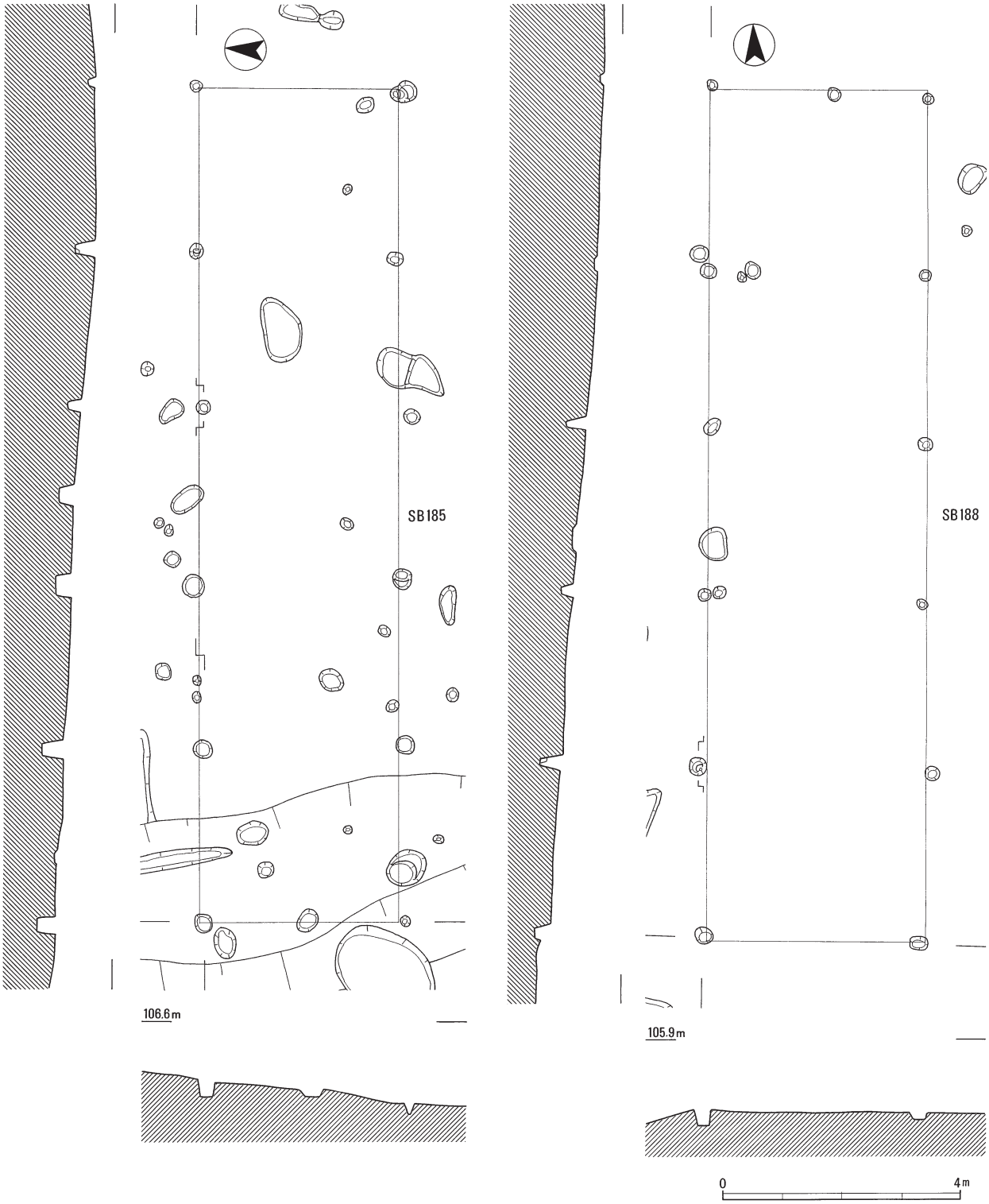
ＳＢ１７９
建物型式：側柱建物
平面規模：桁行３間、梁行１間
建物方位：Ｎ１６°Ｅ
面積：14.58㎡
重複関係：ＳＢ179（中世）→ＳＤ122（中世後期）
　調査区の南部で検出した。柱穴には多くの焼土が入っており、常滑製品の甕・土師器皿・陶器片・南伊勢系の土師器鍋が出土した。建物内土坑ＳＫ29からは常滑製品の甕・土師器皿が出土している。建物方位はＳＢ176・ＳＢ183・ＳＡ180・ＳＡ181とほぼ同じである。
ＳＢ１８２
建物型式：側柱建物
平面規模：桁行３間以上、梁行３間
建物方位：Ｎ２０°Ｅ
面積：38.61㎡以上
　調査区の南端で検出した。柱穴には炭化物を含む焼土が入っており、常滑製品の甕・土師器皿の小片・南伊勢系の土師器皿が出土した。建物方位はＳＢ175とほぼ同じである。
ＳＢ１８３
建物型式：側柱建物
平面規模：桁行３間、梁行２間
建物方位：Ｎ１５°Ｅ
面積：28.29㎡
　調査区の南部で検出した。建物方位はＳＢ176・ＳＢ179・ＳＡ180・ＳＡ181とほぼ同じである。
ＳＢ１８４
建物型式：総柱建物
平面規模：桁行３間、梁行２間
建物方位：Ｎ５°Ｗ
面積：19.38㎡
　調査区の南部で検出した。建物方位はＳＢ185・ＳＢ186とほぼ同じである。
ＳＢ１８５
建物型式：側柱建物
平面規模：桁行５間、梁行１間
建物方位：Ｎ４°Ｗ
面積：45.87㎡
　調査区の南部で検出した。東西に桁行の長い建物である。柱穴からは南伊勢系の土師器鍋・土師器皿が出土した。建物方位はＳＢ184・ＳＢ186とほぼ同じである。
ＳＢ１８６
建物型式：側柱建物
平面規模：桁行２間、梁行１間
建物方位：Ｎ６°Ｗ
面積：12.75㎡
　調査区の東部で検出した。小さな建物である。建物方位はＳＢ184・ＳＢ185とほぼ同じである。
ＳＢ１８７
建物型式：側柱建物
平面規模：桁１間、梁行１間
建物方位：Ｎ５°Ｅ
面積：15.54㎡
　調査区の東部で検出した。小さな建物である。建物方位はＳＢ174とほぼ同じである。
ＳＢ１８８
建物型式：側柱建物
平面規模：桁行５間、梁行２間
建物方位：Ｎ２°Ｅ
面積：51.3㎡
　調査区の東部で検出した。南北に桁行の長い建物である。

２　柱列

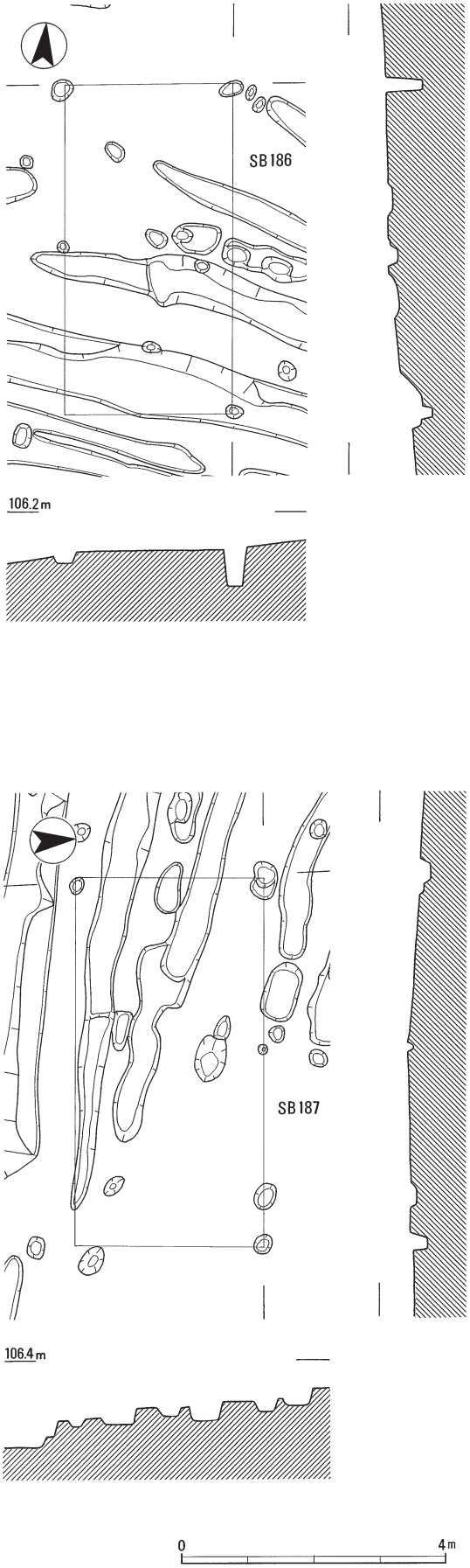
ＳＡ１８０
平面規模：桁行８間以上
建物方位：Ｎ１５°Ｅ
　調査区の南部で検出した。柱穴から土師器鍋の小片・土師器皿の小片・鉄釘が出土した。建物方位はＳＢ176・ＳＢ179・ＳＢ183・ＳＡ181とほぼ同じである。
ＳＡ１８１
平面規模：桁行４間以上
建物方位：Ｎ１５°Ｅ
　調査区の南部で検出した。建物方位はＳＢ176・ＳＢ179・ＳＢ183・ＳＡ180とほぼ同じである。



第11図　ＳＢ179・182・183・184（1：100）



第12図　ＳＢ185・188（1：100）



第13図　ＳＢ186・187（1：100）

３　土坑

土坑は54基を検出した。中世の土坑は、中央部から北部にかけて４基、中央部から南部にかけて26基を確認した。また近世の土坑は、中央部から北部にかけて６基、南部にかけて１基を確認した。土坑の中には墓の可能性があるものも含まれている。

a　中世

ＳＫ１２

形状：不定形

規模：1.1m×1.0m　深さ：18㎝

主要出土遺物：５

時期：中世後期

調査区南端部で検出した浅い土坑である。埋土から中北勢系の土師器皿が出土した。

ＳＫ１７

形状：不定形

規模：2.8m×1.0m　深さ：32㎝

主要出土遺物：３

時期：中世後期

調査区やや南部で検出した。埋土から土師器羽釜・常滑製品の片口鉢・常滑製品の甕が出土した。

ＳＫ２８

形状：楕円形

規模：1.2m×0.5m　深さ：12㎝

主要出土遺物：４

時期：中世後期

調査区南部で検出した。埋土から南伊勢系の土師器皿・土師器鍋・青磁椀が出土した。墓である可能性もある。

ＳＫ３６

形状：不定形

規模：1.9m×1.1m　深さ：32㎝

主要出土遺物：６

時期：14Ｃ？

調査区南部で検出した。埋土から青磁椀・南伊勢系の土師器皿・山茶椀・常滑製品の甕が出土し、少量の焼土・炭化物を含む層を確認した。墓である可能性もある。

ＳＫ４３

形状：楕円形

規模：1.8m×1.5m　深さ：21㎝

第14図　ＳＡ180・181（1：100）

調査区南西部で検出した。埋土から土師器皿が出土し、多くの礫を確認した。

ＳＫ４６

形状：楕円形

規模：1.2m×1.0m　深さ：12㎝

時期：中世後期

調査区南西部で検出した。埋土から常滑製品の甕が出土し、底部で炭を確認した。

ＳＫ５５

形状：不定形

規模：1.2m×1.0m以上　深さ：37㎝

時期：中世後期

重複関係：SK55（中世後期）→SK56（近世）

調査区北部で検出した。埋土から南伊勢系の土師器鍋・鉄製品・常滑製品の甕・土師器皿が出土し、炭化物を含む層を確認した。遺構の重複関係は、上述の通り。

ＳＫ６２

形状：不定形

規模：2.3m×1.4m　深さ：34㎝

調査区中央部で検出した。埋土から常滑製品の甕・土師器小片が出土し、少量の炭化物を含む層を確認した。

ＳＫ６４

形状：不定形

規模：0.7m×0.6m以上　深さ：24㎝

主要出土遺物：７

調査区中央部で検出した。埋土から土師器皿が出土した。

ｂ　近世

ＳＫ５８

形状：長方形

規模：2.3m×1.8m　深さ：60㎝

主要出土遺物：８・９・１０

調査区中央部で検出した。埋土から近世徳利（８）・陶器甕（９）・急須（10）・さん瓦・鉄製品が出土した。

ＳＫ６０

形状：長方形

規模：3.5m×2.0m　深さ：16㎝

調査区中央部で検出した。浅く、長方形の土坑である。水槽のようなものかと思われる。

ＳＫ６１

形状：長方形

規模：3.3m×2.7m　深さ：84㎝

調査区中央部で検出した。埋土から常滑製品の甕・さん瓦・瓦質焙烙が出土した。水槽のようなものかと思われる。

ｃ　時期不明

ＳＫ８

形状：楕円形

規模：0.9m×0.7m　深さ：23㎝

調査区東部で検出した。上面が削平されている。

ＳＫ９

形状：楕円形

規模：0.7m×0.6m　深さ：65㎝

調査区東部で検出した。上面が削平されている。断面がU字状である。埋土から多くの石が出土した。

４　火葬穴

火葬穴は13基検出した。調査区東部に６基、中央部に５基、トレンチで２基確認した。中世の火葬穴は東部と中央部にそれぞれ１基ずつ、また近世の火葬穴も東部と中央部でそれぞれ１基ずつ確認した。

ＳＸ５

形状：楕円形

規模：1.8m×1.3m　深さ：13㎝

時期：中世？

調査区東部で検出した。埋土から土師器皿・骨が出土し、炭化物を含む層を確認した。

ＳＸ１０

形状：楕円形

規模：1.2m×0.7m　深さ：8㎝

埋土から焼土・骨が出土し、炭化物を多く含む層を確認した。

ＳＸ７２

形状：楕円形

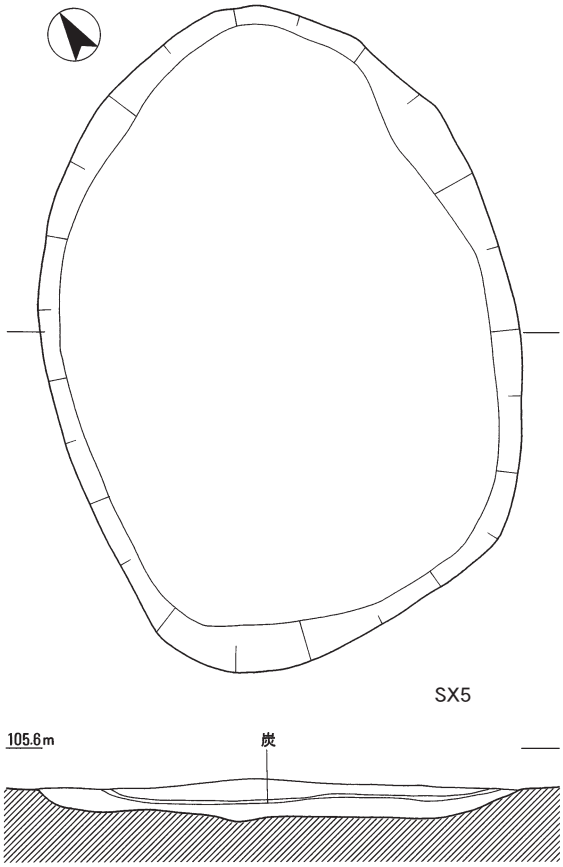
規模：0.5m×0.5m　深さ：52㎝

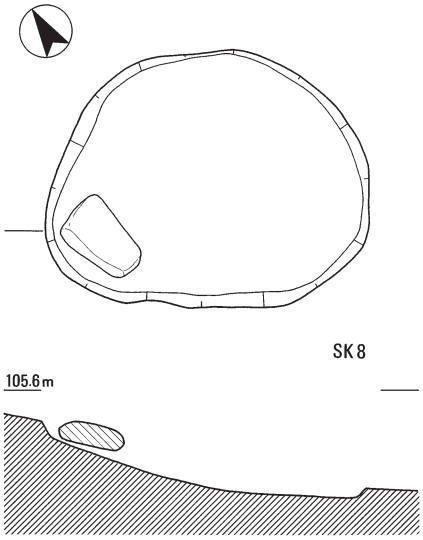
Ｃトレンチ調査で確認した。埋土から炭・骨が出土し、炭化物を含む層を確認した。

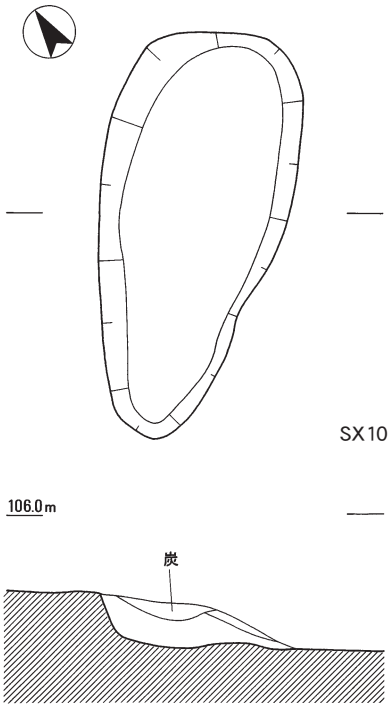
ＳＸ７３

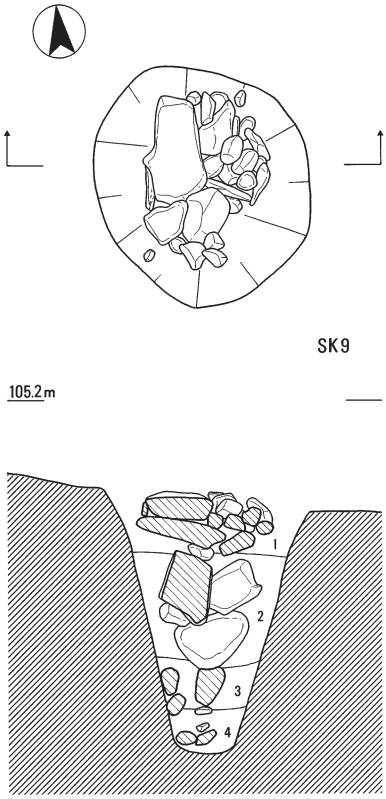
形状：楕円形

規模：1.4m×1.1m　深さ：18㎝





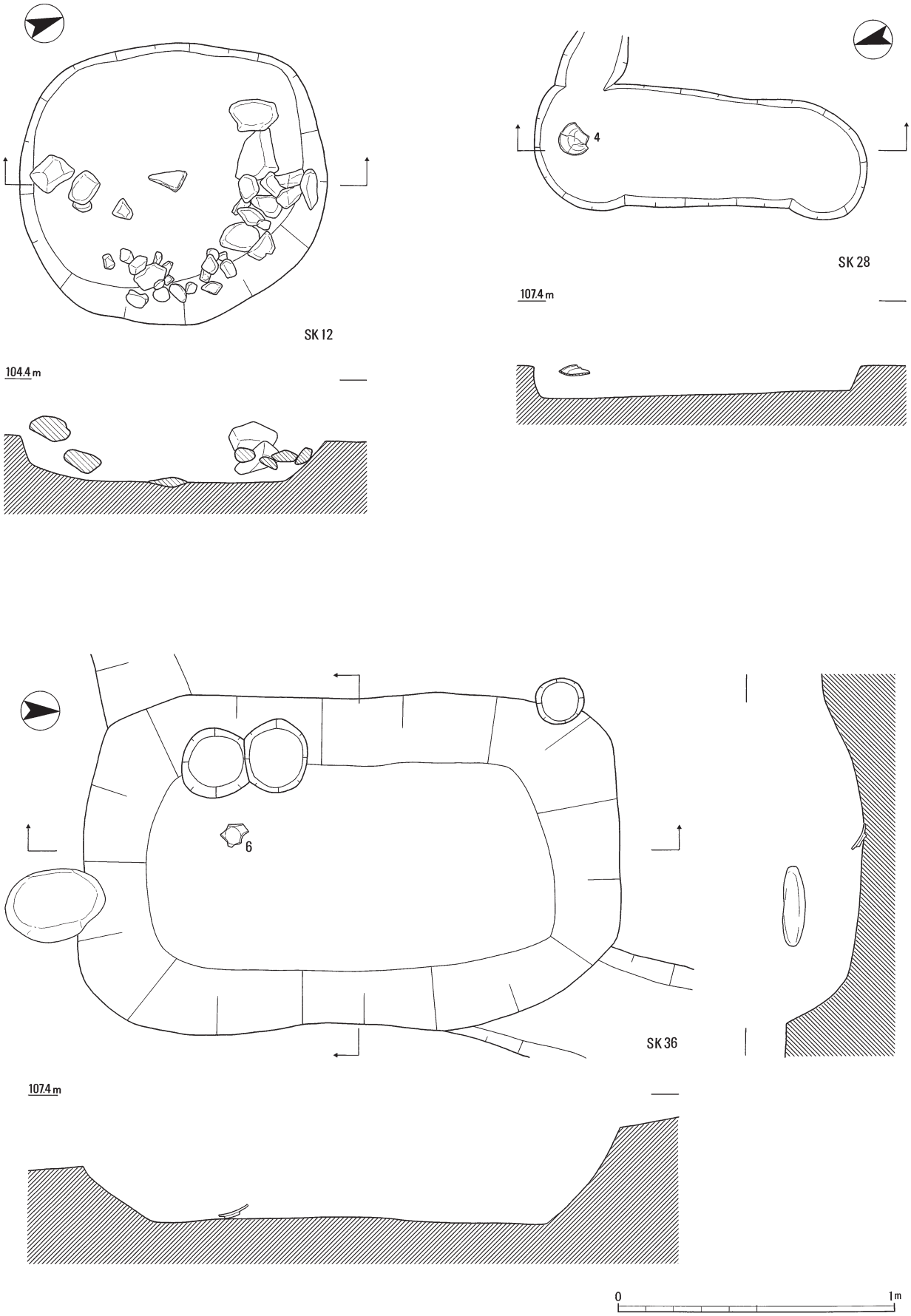




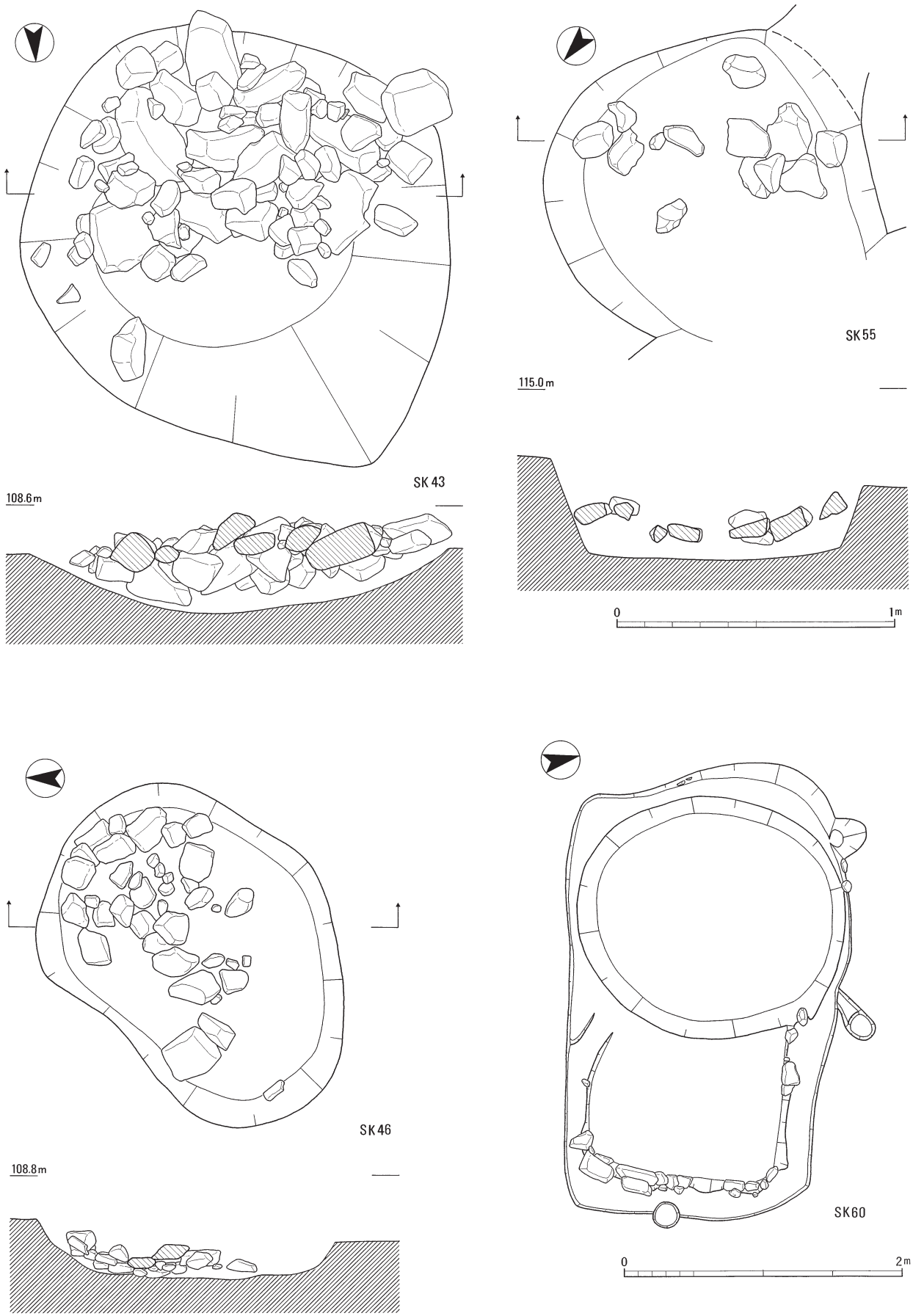
1. 黄褐色粘質土
2. 褐色粘質土
3. 黄褐色土（上層より黄が強い）
4. 褐色土（やや炭混じる）

0　1m

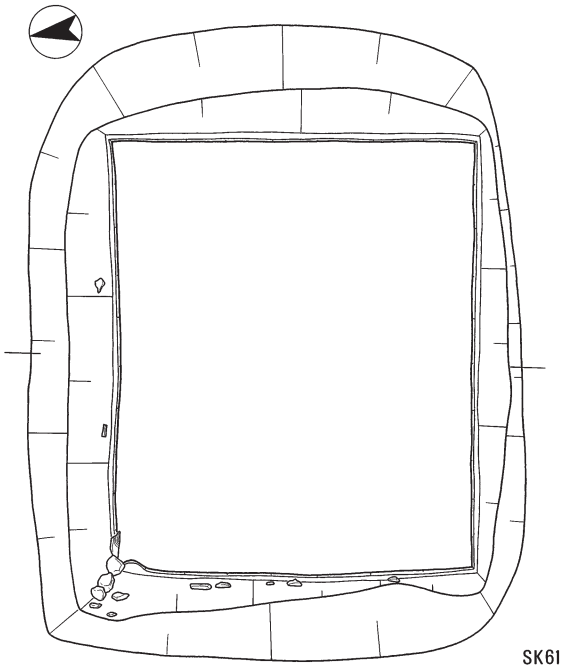
第15図　ＳＸ５・10、ＳＫ８・９（1：20）

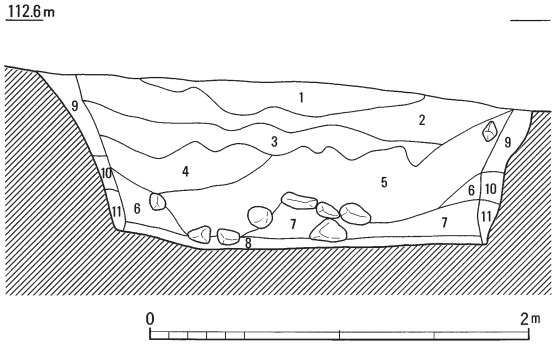


第16図　ＳＫ12・28・36（1：20）



第17図　ＳＫ43･46･55（1：20）・ＳＫ60（1：40）





SK61土層断面図

1. 褐色、白色の微小な砂粒混じる。しまりは非常に強い。
2. 暗褐色、指先大の礫混じる。しまり弱い。
3. 暗褐色、やや明るい褐色土粒が混じる。指先大の礫が少量入る。しまり弱い。
4. 暗褐色灰色土粒が混じる。しまりやや弱い。
5. こぶし大の礫を多く含み、その隙間に灰色土が少量入る。
6. 褐色、しまりは弱い。側壁の明黄褐色粘質土の崩落土と思われる。
7. 黒味を帯びた灰色、指先大の礫が入る。しまりやや強い。
8. 灰色粘質土　貼り床
9. 明黄褐色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 8よりやや暗い灰色粘質土

第18図　ＳＫ61（1：40）・ＳＫ62（1：20）

Ｃトレンチ調査で確認した。埋土から炭・骨・鉄釘が出土し、炭化物を含む層を確認した。

5　溝

調査区全体で、65条の溝を検出した。中世の溝は17条、近世の溝は14条確認した。また調査区北部では、ほぼ南北に方向に走る溝が平行に13条並ぶ。

a　中世

ＳＤ１２７

長さ：5.5m以上　幅：1.2m　深さ：20㎝

時期：１４Ｃ？

出土主要遺物：２２

調査区を東西に走る溝状遺構。埋土から南伊勢系の土師器皿（22）・常滑製品の甕・壷が出土した。

ＳＤ１２９

長さ：9.9m　幅：0.6m　深さ：13㎝

出土主要遺物：２１

調査区を東西に走る溝状遺構である。埋土から中北勢系の土師器皿（21)、瀬戸美濃製品の灰釉平椀、鉄製品が出土し、炭・焼土を含む層を確認した。

ＳＤ１３０

長さ：15.6m以上　幅：0.9m　深さ：29㎝

出土主要遺物：２３～２７

調査区南部を東西に走る溝状遺構である。埋土から南伊勢系の土師器皿（23・24）・中北勢系の土師器皿（25～27）が出土した。

ＳＤ１３４

長さ：26.1m以上　幅：1.2m　深さ：23㎝

出土主要遺物：２８～３１

調査区を南北に走る区画溝である。埋土から土師器皿（28）・南伊勢系の土師器羽釜（29）・中北勢系の土師器皿（30）・土師器小皿（31）が出土した。

ＳＤ１３８

長さ：12.1m以上　幅：1.5m　深さ：61㎝

時期：中世後期

出土主要遺物：３２～３４

調査区を南北に走る溝状遺構である。埋土から小型硯（32）・常滑製品の広口壷（33）・土師器小皿（34）・瀬戸美濃製品の鉄釉縁釉小皿・南伊勢系の土師器鍋が出土した。

b　近世

ＳＤ１２３

長さ：10.4m以上　幅：0.8m　深さ：36㎝

出土主要遺物：２０

調査区を南北に走る長い溝状遺構。埋土から土師器小片・常滑製品の甕・近世陶器・近世瓦・山茶椀・土師器羽釜・土師器皿・鉄製品が出土した。

ＳＤ１５５

長さ：38.2m以上　幅：0.7m

出土主要遺物：３５～３９

調査区北部を南北に走る長い溝状遺構である。埋土から、近世陶器・磁器・瓦・瓦質焙烙・信楽焼が出土した。

ＳＤ１５９

長さ：65.5m　幅：0.9.m

出土主要遺物：４０

調査区北部を南北に走る長い溝状遺構である。埋土から、近世陶器・瓦・近世磁器・サヤ（３個体分）・常滑小片・ガラスが出土した。

6　井戸

調査区東部の谷に近い部分で中世の素堀り井戸を２基検出した。

ＳＥ８１

形態：素掘

掘方形状：円形

掘方規模：1.7m×1.6m

深さ：1.1m

時期：中世後期

調査区中央部からやや南東の谷に近い部分ＳＢ183の北側で検出した。出土遺物はない。

ＳＥ８２

形態：素堀

掘方形状：円形

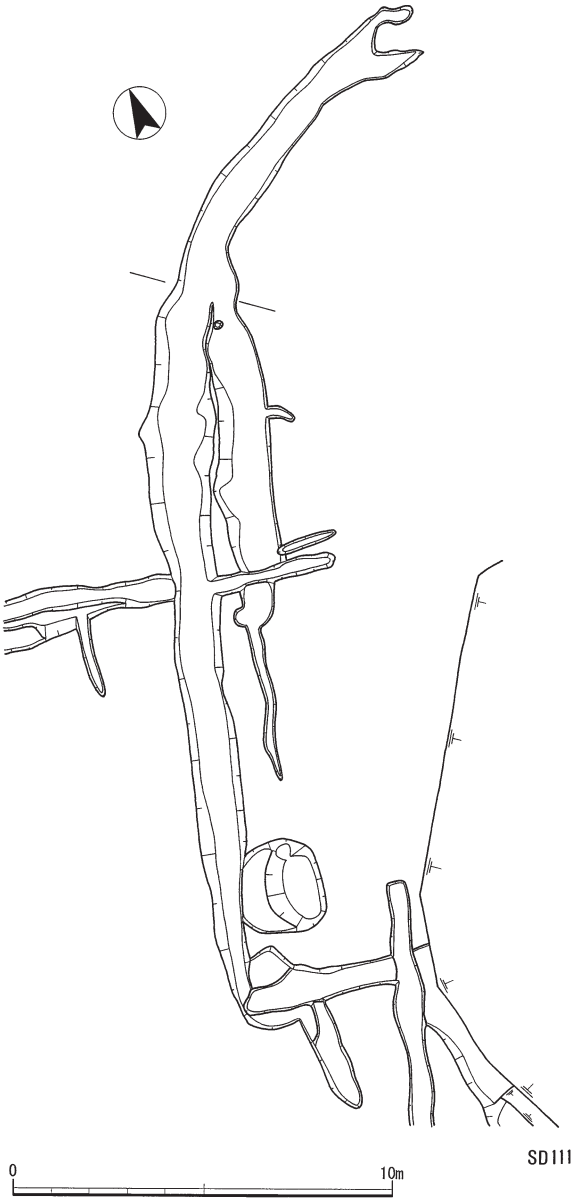
掘方規模：1.2m×1.1m

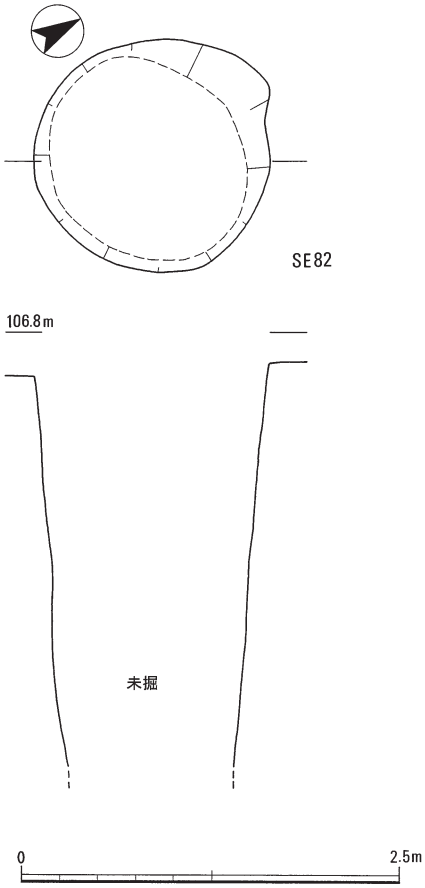
深さ：1.2m

時期：中世後期

主要出土遺物：１１～１３

調査区南部の堀立柱建物ＳＢ178・ＳＢ179の東部で検出した。埋土から土師器皿（11）・南伊勢系のミニュチア羽釜（12）・青磁椀（13）・常滑製品の甕・山茶椀小片が出土した。　（前野謙一）





第19図　ＳＤ111（平面図1：200・断面図1：40）ＳＥ82（1：50）

新遺構番号	遺構番号	大地区	小地区	遺構名	形状	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	時期	備考	遺物
SX1	SK1	D	J5	SK1	不定形	2.1	0.6	0.15	近世	炭化物多い	土師器皿(中北勢)・近世瓦
SX2	SK2	D	I5	SK1	楕円形	0.8	0.5	0.21	不明	焼土	土師器小片・鉄釘
SX3	SK3	D	I7	SK1	楕円形	0.7	0.4	0.11	不明	炭化物・骨	土師器小片
SX4	SK4	D			楕円形	0.7	0.6	0.40		骨	骨
SX5	SK5	D	I8	SK2	楕円形	1.8	1.3	0.13	中世？		土師器皿・骨
SK6	SK6	D	F5	SK1	楕円形	1.0	0.7	0.10	中世？		
SK7	SK7	D			不定形	0.7	0.3	0.13			土師器皿
SK8	SK8	D			楕円形	0.9	0.7	0.23			
SK9	SK9	D			楕円形	0.7	0.6	0.65			
SX10	SK10	D			楕円形	1.1	0.6	0.15	不明	炭化物多い・焼土・骨	出土遺物なし・骨
SK11	SK11	D			不定形	3.6	1.2	0.30			
SK12	SK12	D			不定形	1.1	1.0	0.18	中世後期		土師器皿(中北勢)
SK13	SK13	D	E15	SK13	長方形	3.8	2.8	0.41			常滑甕・土師器皿・鉄釘
SK14	SK14	D	D7	SK1	不定形	1.1	0.7	0.76	中世？	炭化物含む	土師器小片
SK15	SK15	D	C7・C8	SK1	不定形	5.1	2.7	0.29	中世前期？		山茶椀・土師器皿・羽釜・鉄製品
SK16	SK16	D	C6	SK1	不定形	2.6	1.3		中世後期		常滑片口鉢・常滑甕
SK17	SK17	D	B5	SK1	不定形	2.8	1.0	0.32	中世後期		常滑片口鉢・常滑甕・土師器羽釜
SK18	SK18	D			不定形	1.6	1.3	0.20			
SK19	SK19	D	D8	SK1	不定形	3.6	0.9	0.45	中前		土師器鍋(南伊勢)・常滑甕
SK20	SK20	D	C9	SK1	不定形	2.1	1.4	0.16	中世後期？		土師器皿(中北勢)・常滑甕
SK21	SK21	D			不定形	0.6	0.5	0.23			
SK22	SK22	D	B9	SK4	不定形	3.1	2.6	0.15	中世後期		土師器皿
SK23	SK23	D	B9	SK5	楕円形	0.6	0.5	0.35	中世後期		土師器小片
SK24	SK24	D	B9	SK1	楕円形	1.1	0.7	0.07	中世後期？	焼土・炭混じり	土師器皿
SX25	SK25	D	B9	SK2	楕円形	0.6	0.4	0.23	不明	焼土	土師器小片・鉄釘
SK26	SK26	D	A9	SK1	不定形	1.4	1.1	0.25	中世		土師器皿(南伊勢)
SX27	SK27	D	B9	SK3	楕円形	2.0	1.0	0.31	中世	焼土・土器混じり・縁辺部被熱	常滑甕・土師器皿(南伊勢)
SK28	SK28	D	A9	SK2	楕円形	1.2	0.5	0.12	中世後期		土師器皿(南伊勢)・土師器鍋(南伊勢)・青磁椀
SK29	SK29	D	B11	SK1	長方形	2.6	2.0	0.43	中世		土師器皿・常滑甕(8か9型式)
SK30	SK30	D	C11	SK1	楕円形	0.9	0.6	0.29		炭化物混じり	
SK31	SK31	D	C12	SK1下層	長方形	1.5	1.0	0.43	不明		土師器小片・鉄釘
SK32	SK32	D	C12	SK1	不定形	2.1	1.5≦	0.15	中世後期		土師器皿(南伊勢)・常滑甕
SK33	SK33	D	C14	SK1	不定形	2.0	1.1	0.11	中世後期？	焼土・炭化物	土師器皿
SK34	SK34	D	A13	SK1	楕円形	0.9	0.7	0.15	中世後期		土師器皿(中北勢)・常滑甕
SK35	SK35	D	A13	SK2	不定形	2.0	1.1	0.12	不明	焼土・炭化物少し含む	土師器小片
SK36	SK36	C	Y10	SK1	不定形	1.9	1.1	0.32	14C？	焼土・炭化物少し含む	青磁椀・土師器皿・土師器皿(南伊勢)・山茶椀・常滑甕
SK37	SK37	C	Y11	SK1	不定形	2.2	1.8	0.42	中世		常滑甕・土師器小片
SK38	SK38	C	Y12	SK1	不定形	1.1	0.7	0.20	近世	炭・焼土混じる	土師器皿(南伊勢)・土師器皿・近世瓦
SK39	SK39	C	X11	SK1	不定形	2.0	1.1	0.06	中世		常滑甕
SK40	SK40	C	W9	SK1	不定形	1.3	0.5	0.23	中世		土師器皿
SK41	SK41	C	U9	SK1	楕円形	0.6	0.4	0.07	不明		鉄製品
SX42	SK42	C	W5	SK1	楕円形	1.2	1.1	0.14	不明	炭化物多い・礫	出土遺物なし
SK43	SK43	C	V5	SK1	不定形	1.8	1.5	0.21	中世	礫多い	土師器皿
SK44	SK44	C	V4	SK1	楕円形	1.5	1.4	0.29	中世	炭化物	土師器皿
SX45	SK45	C	V4	SK1	楕円形	1.0	0.5		近世	炭化物	土師器皿？
SK46	SK46	C	T5	SK1	楕円形	1.3	1.0	0.19	中世後期	炭含む	常滑甕(8～9型式)、片口鉢
SK47	SK47	A	Q24	SK2	楕円形	0.6	0.3	0.18	中世		土師器皿
SK48	SK48	A	Q24	SK1	楕円形	1.5	0.8	0.10	中世		土師器皿(南伊勢)
SX49	SK49	A	R23		不定形	2.2	1.2	0.13		炭・焼土含む	
SK50	SK50	B	L14	SK1	長方形	1.7	1.4	0.60		獣骨	
SK51	SK51	B	J13	SK1	楕円形	0.8	0.7	0.44	時期不明		鉄製品
SK52	SK52	B	I12	SK1	楕円形	1.2	0.6	0.27			骨
SK53	SK53	B	H13	SK1	不定形	1.2	0.8	0.14	中世後期		土師器皿・瀬戸天目茶椀
SK54	SK54	B	J9	SK1	楕円形	0.5	0.4		近世		近世陶器
SK55	SK55	B	J15	SK2	不定形	1.2	1.0≦	0.37	中世後期	炭化物含むSK55→SK56	土師器皿・鍋(南伊勢)・鉄製品・常滑甕
SK56	SK56	B	J15	SK1	不定形	2.8	1.1≦	0.22	近世	SK55→SK56	近世陶器
SK57	SK57				不定形	1.9	1.5			新しい？骨出土	
SK58	SK58	B	B18・19	SK1	長方形	2.3	1.8	0.60	近世		近世徳利・陶器甕・急須・さん瓦・鉄製品
SK59	SK59	B	B19	SK2	長方形	1.6	1.1	0.54	近世		さん瓦
SK60	SK60	B	D21	SK1	長方形	3.5	2.0	0.16	近世	水槽か？	
SK61	SK61	B	B21	SK1	長方形	3.3	2.7	0.84	近世	水槽のようなものか	常滑甕・さん瓦・瓦質焙烙
SK62	SK62	B	C23	SK1	不定形	2.3	1.4	0.34	中世	炭化物少ない	常滑甕・土師器小片
SK63	SK63				楕円形	1.8	1.7	0.21		炭化物少ない	
SK64	SK64	B	D24	SK1	不定形	0.7	0.6	0.24	中世		土師器皿
SK65	SK65	C	U5	SK1	不定形	1.0	0.6	0.28	中世後期		常滑甕9型式・瓦質土器・火鉢？
SK66	SK66	D	C9	SK2	楕円形	0.4	0.2				粘質塊(焼土塊？)
SK71	SK71				不定形	1.0	0.8	0.24		炭わずか	
SK72	CトレンチSK5				楕円形	0.5	0.5	0.04			炭・骨
SK73	CトレンチSK6				楕円形	1.4	1.1				炭・骨・鉄釘
SK74	EトレンチSK2				楕円形	0.9	0.7≦				土師器皿・盤類(古瀬戸)
SK75		B・D	D25・D1		不定形	2.7	0.8≦	0.69			
SE81	SE1	D	E6	SE1	円形	1.7	1.6	1.06	中世後期		
SE82	SE2	D	D10	SE2	円形	1.2	1.1	1.22	中世後期		青磁椀・土師器皿・土師器皿(南伊勢)・ミニュチア羽釜(南伊勢)3段階・常滑甕・山茶椀小片
SZ91	SZ1	C	Y10	SZ1					中世		青磁椀・土師器皿小片・鍋(南伊勢)
SZ92	SZ2	C	Y12	SZ2					中世	焼土あり	土師器羽釜
SZ93	SZ3	C	X12	SZ1					中世		山茶椀小片
SZ94	SZ4	C	X12	SZ2					中世		土師器小片
SZ95	SZ5	B	D16	SZ1					中世		土師器皿

第４表　遺構一覧表①

新遺構番号	遺構番号	大地区	小地区	遺構名	長さ(m)	幅 (m)	深さ(m)	時期	備考
SD101	SD1	D	J10	SD10	10.4≦	0.4	0.15	近世	
SD102	SD2	D	M10,J9,L10	SD1	16.5≦	0.8	0.13	中世	
SD103	SD3	D	J9	SD2	9.8	0.7	0.06		
SD104	SD4	D	K9	SD1	5.3	0.5	0.08		
SD105	SD5	D	K8	SD1	2.4	0.4	0.09		
SD106	SD6	D	I8	SD1	2.6	0.4	0.16		
SD107	SD7	D	I5	SD1	4.3	0.8	0.06	中世？	焼土・炭化物含む
SD108	SD8	D	H5	SD1	3.6≦	0.6	0.14	不明	
SD109	SD9	D	B5	SD1(カクラン)	5.5≦	1.1	0.12	近世	
SD110	SD10	D	H8	SD1	0.9	0.3	0.08		
SD111	SD11	D	G7,E10	SD1	32.5	1.6	0.18	中世前期	
SD112	SD12	C・D	T6,W7/C8	SD1/SD2(カクランミゾ)	33.7	1.1	0.11	近代	
SD113	SD13	D	B8,D9	SD1	56.4	1.4	0.28	近世？	
SD114	SD14	D	E8	SD1	2.8	0.6	0.09	不明	
SD115	SD15	D	F14	SD1	7.6≦	1.4	0.14	中世？	
SD116	SD16	D	E14	SD1	6.8≦	0.5	0.15	不明	
SD117	SD17	D	D17	SD1	14.9≦	2.4	0.10	近世	
SD118	SD18	D	D13	SD1	17.2	1.6	0.12	不明	
SD119	SD19	D	D13/A12	SD2/SD1	16.8	0.9	0.13	近世	
SD120	SD20	D	C16	SD1	2.0	0.6	0.13		
SD121	SD21	D	C6	SD1	3.6≦	0.9	0.13		
SD122	SD22	C・D	Y9,Y10,B10	SD1	7.7	0.4	0.18	中世後期	SE82に対応する溝　SB179→SD122
SD123	SD23	D	A10	SD1	10.4≦	0.8	0.36	近世	
SD124	SD24	D	A9	SD3	9.6≦	0.9	0.19	中世後期	
SD125	SD25	D	A10	SD3	1.3≦	0.4	0.17	中世後期	
SD126	SD26	C・D	Y8,A9/X8	SD4/SD1	20.7≦	1.2	0.21	中世	
SD127	SD27	C	X10	SD1	5.5≦	0.8	0.20	中世	
SD128	SD28	C	W11	SD1	1.7≦	0.6	0.16	中世？	
SD129	SD29	C	X11,Y11/W11	SD1/SD2	9.9	0.6	0.13	中世	炭・焼土まじる
SD130	SD30	C	X12,Y12	SD1	15.6≦	0.9	0.29		
SD131	SD31	C	C11	SD1	1.1	0.4	0.17		
SD132	SD32	C	X7	SD1	14.9≦	1.7	0.34	近世	
SD133	SD33	C	X5	SD1	5.0	0.9≦	0.07		
SD134	SD34	C	U3	SD1	26.1≦	1.2	0.23	中世	
SD135	SD35	C・D	B8,W8	SD1	5.7	1.4	0.29		
SD136	SD36	C	V10/W7	SD1/SD2	13.8	1.2	0.46	中世	
SD137	SD37	C	U11	SD1	1.9≦	0.6	0.18		
SD138	SD38	C	T6/U4	SD2/SD1	12.1≦	1.5	0.61	中世後期	
SD139	SD39	C	U5	SD1	6.2	0.4			
SD140	SD40	C	T2	SD1	13.1≦	1.0	0.12		
SD141	SD41	C	T4	SD1	22.8≦	0.8	0.09		
SD142	SD42	C	R6	SD1	18.8	1.5	0.09	中世？	
SD143	SD43	C	N1	SD1	32.6	1.0	0.17	近世	
SD144	SD44	C	N2	SD1	4.1	0.6	0.06		
SD145	SD45	C	Y13	SD1	3.3≦	0.3	0.13		
SD146	SD46	C	Y14	SD1	1.6≦	0.4	0.12		
SD147	SD47	B	J18,I22,K17	SD1	47.2≦	0.7			
SD148	SD48	B	I20	SD1	52.8	0.6			
SD149	SD49	B	I18	SD1	51.6	0.8		近世	
SD150	SD50	B	H18,G23,G20	SD1	51.9	0.9		近世	
SD151	SD51	B	F21	SD1	53.6	0.6		近世	
SD152	SD52	B	E24	SD1	54.9	0.8			
SD153	SD53	B	F16,G16	SD1	39.8	1.0		近世	
SD154	SD54	B	E17,F14	SD2	39.6≦	1.0		近世	
SD155	SD55	B	E16/D18	SD1/SD2	38.2≦	0.7		近世	
SD156	SD56	B			39.8≦	0.7			
SD157	SD57	B	D14/E11,D16	SD2/SD1	40.3	0.7			
SD158	SD58	B	D14	SD1	41.3	0.6			
SD159	SD59	B	D12	SD1	65.5	0.9		近代	
SD160	SD60	B	I14	SD1	7.0	0.8	0.13	中世？	
SD161	SD61	B			14.4	0.6	0.12		
SD162	SD62	B			14.0	0.8	0.30		
SD163	SD63	B	D20	SD2	3.8	0.7	0.05		
SD164	SD64	B							
SD165	SD65	B	E18	SD1				中世？	

第５表　遺構一覧表②

新遺構番号	遺構番号	大地区	グリット	間 桁×梁	桁行 (m)	梁行 (m)	建物面積 (㎡)	建物方向	建物内 土坑	新旧関係 (古い→ 新しい)
SB170	SB170	B	d10～12、 e10～13、f12	4×2	7.80	4.50	35.10	N29° W		
SB171	SB171	B	b21、c20～22、 d20～23、 e21～22	4×2	10.00	5.50	55.50	N30° E		
SB172	SB172	B	c23～24	2×2	4.40	3.00	13.20	N10° E		
SB173	SB173	B・D	b･c･d25、 d1	4×1≦	8.20	1.4≦	11.55≦	N10° E	SK75	
SB174	SB174	C	t･u･v10～11	6≦×2	7.7≦	3.90	30. 03≦	N 7° E		
SB175	SB175	C	w.x10～11、 y10	4×2	6.30	3.90	24.57	N20° E		
SB176	SB176	C・D	y11～12、 a･b11～12	5×3	11.10	4.80	53.28	N16° E		
SB177	SB177	D	a･b11～12	2×2	3.90	3.60	14.04	N10° E		
SB178	SB178	D	a･b8～11、 c9～11	6×3	10.50	6.30	66.15	N10° E		
SB179	SB179	D	b9～11、 c10	3×1	5.40	2.70	14.58	N16° E	SK29	SB179→ SD122
SA180	SA180	D	a･b･c8、 c･d9	8≦	15. 60≦			N15° E		
SA181	SA181	D	d9～11	4≦	8.85≦			N15° E		
SB182	SB182	C	x･y12～13	3≦×3	6.60≦	5.85	38. 61≦	N20° E		
SB183	SB183	D	c7、d6～7、 e6～8	3×2	6.90	4.10	28.29	N15° E		
SB184	SB184	D	j･k6～7	3×2	5.10	3.80	19.38	N 5° W		
SB185	SB185	D	i･j･k･l7～8	5×1	13.90	3.30	45.87	N 4° W		
SB186	SB186	D	j8～10、 k8～9	2×1	4.95	2.55	12.75	N 6° W		
SB187	SB187	D	k･l･m9	1×1	5.55	2.85	15.54	N 5° E		
SB188	SB188	D	k･l11～14	5×2	14.25	3.60	51.30	N 2° E		

第６表　遺構一覧表③

Ⅳ　遺物

1　中世以前の遺物

土坑から出土しているが、混入遺物である可能性が高い。２は磨製石斧、石材はハイアロクラスタイト[1]か。片刃であり、弥生時代のものかと思われる。

2　中世以降の遺物

①土坑出土遺物（１・３～10）

３はSK17出土の土師器羽釜。鍔が体部最大径の部分より上にあり、その上には短い口縁部が付く。口縁端部の上面には面を持つ。南伊勢系のものである可能性がある。

４はSK28、５はSK12、７はSK64出土の土師器皿。いずれも南伊勢系のものと思われる。７は灯明皿として使用されていたらしく、油煙の痕跡が残る。６はSK36出土の青磁椀。底部内面に陰刻による花紋が施される。

１はSK32出土の砥石。青色の凝灰岩製である。

８～10はSK58出土の陶器。８は徳利。瀬戸美濃製品[2]か。体部に「平尾」「紺兵」「と㊨　弐百廿五」と書かれている。明治時代以降のものであろう。９は信楽製品の鉢。10は信楽製品の急須。

②井戸出土遺物（11～13）

11・12はSE82から出土した。11は土師器皿。南伊勢系の皿ではない。12はミニチュアの羽釜か。13は青磁椀。火を受けている。

③溝出土遺物（20～40）

20はSD123から出土した瀬戸美濃製品の尊式花瓶。古瀬戸後Ⅲ期から後Ⅳ期古段階のものである。

21はSD129から出土した土師器皿。器壁が厚く、内面に稜線を持つ。中北勢系のものと思われる。22はSD127出土の南伊勢系B系統の皿。口径は10㎝ほどで、14世紀前半頃のものと思われる[3]。

23～27はSD130出土の土師器皿。23・24は南伊勢系、25～27は中北勢系のものである。

28～31はSD134出土の土師器。28の口縁部に油煙の痕跡が残る。29は、南伊勢系の土師器羽釜、30は中北勢系の土師器皿、31は小皿。

32はSD138出土の小型硯。33は常滑製品の広口壷。口縁端部は玉縁状になる。中野晴久氏の編年の第10型式のものである[4]。34は土師器小皿。

35～39はSD155から出土した。瀬戸美濃系の小椀。明治時代のものか。36は瀬戸美濃製品の小椀。連房式登窯の11小期のものである。37は陶器の椀。底部内面に「魁」の文字が描かれ、底部外面に「永楽」の印が押される。体部の内外面には、赤絵で花が描かれる。尾野善裕氏のご教示によると、幕末から明治初年の12代目永楽善五郎（和全）の作によるものである[5]。38・39は信楽製品の鉢。

40はSD159出土の信楽製品。窯道具のサヤを転用している。

④ピット出土遺物

41はD－A10ピット３、42はD－B９ピット２、43はD－C８ピット２から出土した。41・42は中北勢系の土師器皿。

44はD－E５ピット１、45はB－H15ピット１から出土した瀬戸美濃製品の天目茶椀。44は古瀬戸後Ⅳ期古段階のもの、45は古瀬戸後Ⅲ期のものである。46はB－B25ピット２から出土した瀬戸美濃製品の灰釉平椀。古瀬戸後Ⅲ期のものである。

48はD－A11ピット１から、50はC－X10ピット２から出土した常滑製品の甕。48は第10型式、50は第７型式新段階のものである。

49はC－T10ピット１から出土した瓦質土器の火鉢。火を受けている。

47は鉄製品の底部。用途は不明である。

⑤包含層出土遺物（14～19）

14は土師器皿。明瞭ではないものの内面に稜線を持つ。中北勢系のものか。15は尾張型の山茶椀。藤澤良祐氏の編年の９型式のものである。16は瀬戸美濃製品の花瓶か。古瀬戸中期のものである可能性がある。17は瀬戸美濃製品の根来型瓶子。古瀬戸後期のものである。18は天目茶椀。古瀬戸後Ⅱ期のものである。19は尾張型10型式の山茶椀。

（竹田憲治）

①石材については愛知県埋蔵文化財センター堀木真美子氏に実見の上、ご指導をいただいた。

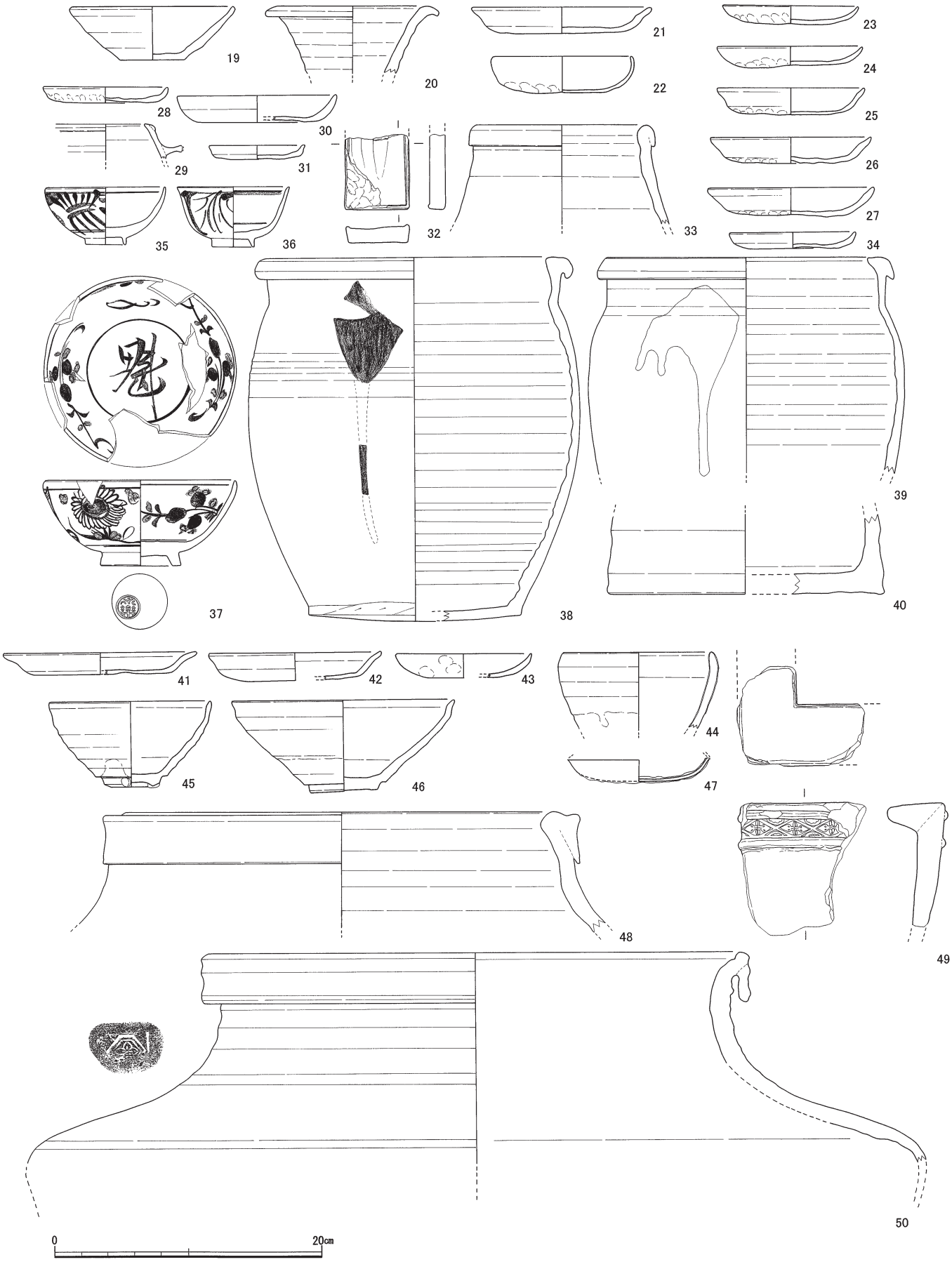
②瀬戸美濃製品・山茶椀については、藤澤良祐氏に実見の上、ご指導をいただいた。

③南伊勢系の土師器皿については、伊藤裕偉「土師器皿類の変遷」(『北畠氏館跡９』美杉村教育委員会　2005年)による。

④常滑製品については、中野晴久氏に実見の上、ご指導をいただいた。

⑤尾野善裕氏に実見の上、ご指導をいただいた。

第20図　出土遺物①　1・2（1：3）・3～18（1：4）



第21図　出土遺物②（1：4）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調		残存度	特記事項
1	008-01	石製品	砥石	Ｄ－Ｃ12	ＳＫ32	(長)10.6　(幅)4.8 (厚さ)2.3						
2	009-01	石器	磨製石斧	Ｄ－Ｃ12	ＳＫ31	(長)8.5　(幅)5.1 (厚さ)1.5						
3	007-01	土師器	羽釜	Ｄ－Ｂ5	ＳＫ17	(口) 19.8 (フチ)24.0	外：ヨコナデ→ﾊｹﾒ→ケズリ 内：ヨコナデ→工具によるナデ	やや密	7.5YR6/3	にぶい褐色	口縁12/12	
4	006-01	土師器	皿	Ｄ－Ａ9	ＳＫ28	(口) 10.9 (高) 1.5	外：オサエナデ→オサエ 内：ナデ	やや密	10YR8/3	浅黄橙	5/6	
5	029-01	土師器	皿	Ｄ－Ｆ15	ＳＫ12	(口) 10.0 (高) 1.2	外：ユビオサエ後ナデ 内：ユビオサエ後ナデ	やや密	10YR8/2	灰白	口縁2/12	
6	005-01	磁器	椀	Ｃ－Ｙ10	ＳＫ36	(高台) 5.3	外：ロクロナデ→削り出し高台 内：ロクロナデ	やや密	素地：10YR8/1 釉：	灰白 緑灰色	高台完存	内面に花紋
7	029-02	土師器	皿	Ｂ－Ｄ24	ＳＫ64	(口) 9.8 (高) 0.9	外：ユビオサエ後ナデ 内：ユビオサエ後ナデ	やや密	10YR8/4	浅黄橙	口縁6/12	
8	001-01	陶器	徳利	Ｂ－Ｂ18	ＳＫ58	(口) 3.0 (高) 25.4 (底) 11.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	素地:10YR8/2 釉：	灰白 灰色	完形	
9	003-01	陶器	鉢	Ｂ－Ｂ１ 8	ＳＫ58	(口) 29.2 (高) 16.4 (底) 17.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地:2.5Y8/2 釉：5Y8/3～7/3	灰白 淡黄～淡黄	口縁６/12	
10	004-01	陶器	急須	Ｂ－Ｂ19	ＳＫ58	(口) 5.9 (高) 10.9 (底) 6.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地：2.5Y7/2 釉：	灰黄 緑灰色	口縁2/12	
11	025-01	土師器	皿	Ｄ－Ｄ10	ＳＥ82	(口) 11.4 (高) 2.3	外：ヨコナデ→オサエナデ 内：ヨコナデ→オサエナデ	密	10YR7/2	にぶい黄橙	口縁5/8	
12	026-02	土師器	羽釜	Ｄ－Ｄ10	ＳＥ82	不明	外：ナデ→貼付けナデ 内：ナデ	やや密	10YR8/3	浅黄橙	小片	
13	025-03	磁器	椀	Ｄ－Ｄ10	ＳＥ82	(高台) 5.0	外：ロクロナデ→削り出し高台 内：ロクロナデ	密	素地:2.5Y6/1 釉：	黄灰 緑灰色	高台1/2	
14	030-02	土師器	皿	Ｂ区中央	表土剥ぎ	(口) 12.0 (高) 2.3	外：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ	やや粗	10YR8/3	浅黄橙	口縁9/12	
15	027-03	須恵器	山茶椀	Ｄ－H9	谷下層	(底) 5.6	外：ロクロナデ→糸切り痕 内：ロクロナデ	やや粗	2.5Y8/3	淡黄	底部3/12	
16	026-03	陶器	花瓶	Ｄ－Ｉ19	谷下層		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地:2.5Y7/3 釉:7.5YR3/2	浅黄 黒褐	小片	
17	026-04	陶器	瓶子	Ａ－Ｑ24	包含層	(底) 11.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	2.5Y8/3	淡黄	底部2/12	根来型瓶子
18	026-05	陶器	天目茶椀	Ｃ－W10	包含層	(口) 12.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地:2.5Y8/2 釉:7.5YR5/3	灰白 にぶい褐	口縁2/12	
19	017-01	陶器	山茶椀	Ｃ－Ｙ10	ＳＤ122	(口) 12.2　(高) 4.0 (底) 4.8	外：ロクロナデ→糸切り痕 内：ロクロナデ	やや密	10YR7/1	灰白	口縁1/4	
20	027-02	陶器	花瓶	Ｄ－Ａ9	ＳＤ123	(口) 11.0 (頸部)8.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地:2.5Y8/4 釉:7.5YR3/1	淡黄 黒褐	口縁1/12 頸部2/12	尊式花瓶
21	018-01	土師器	皿	Ｃ－Ｙ11	ＳＤ129	(口) 13.4 (高) 2.0	外：ナデ→オサエナデ 内：ナデ	やや密	10YR7/2	にぶい黄橙	口縁1/3	
22	016-01	土師器	皿	Ｃ－Ｘ10	ＳＤ127	(口) 10.4 (高) 2.8	外：オサエナデ→オサエ 内：ナデ	密	10YR8/3	浅黄橙	口縁3/4	
23	015-01	土師器	皿	Ｃ－Ｖ12	ＳＤ130	(口) 10.2 (高) 1.4	外：オサエ 内：ナデ	やや密	10YR8/3	浅黄橙	口縁1/3	
24	015-05	土師器	皿	Ｃ－W12	ＳＤ130	(口) 10.9 (高) 1.8	外：オサエ 内：ナデ	やや密	10YR8/2	灰白	口縁5/12	
25	015-02	土師器	皿	Ｃ－Ｖ12	ＳＤ130	(口) 11.0 (高) 2.0	外：オサエナデ 内：ナデ	密	2.5Y8/2	灰白	口縁2/3	
26	015-03	土師器	皿	Ｃ－Ｖ12	ＳＤ130	(口) 12.0 (高) 2.0	外：オサエナデ 内：ナデ	密	2.5Y8/2	灰白	口縁3/4	
27	015-04	土師器	皿	Ｃ－Ｖ12	ＳＤ130	(口) 12.4 (高) 2.2	外：オサエナデ→オサエ 内：ナデ	やや密	2.5Y7/2	灰黄	口縁3/5	
28	014-01	土師器	皿	Ｃ－Ｕ3	ＳＤ134	(口) 9.4 (高) 1.2	外：オサエナデ→オサエ 内：ナデ	密	10YR8/3	浅黄橙	口縁4/5	
29	026-01	土師器	羽釜	Ｃ－Ｔ3	ＳＤ134	不明	外：ナデ→貼付けナデ 内：ナデ	やや粗	7.5YR7/4	にぶい橙	小片	
30	029-03	土師器	皿	Ｃ－Ｕ3	ＳＤ134	(口) 12.0 (高) 2.0	外：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ	やや密	10YR8/3	浅黄橙	口縁4/12	
31	029-04	土師器	小皿	Ｃ－Ｘ4	ＳＤ134	(口) 7.2 (高) 1.1	外：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ	密	10YR8/4	浅黄橙	口縁2/12	
32	029-05	石製品	硯	Ｃ－Ｕ4	ＳＤ138							
33	027-04	陶器	広口壺	Ｃ－R6	ＳＤ142	(口) 12.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	外:5YR5/3 内:5RP6/1	にぶい赤褐 紫灰	口縁2/12	
34	029-06	陶器	小皿	Ｃ－Ｙ14	ＳＤ146	(口) 9.6 (高) 1.2	外：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ	やや粗	10YR8/4	浅黄橙	ほぼ完存	
35	012-05	磁器	小椀	Ｂ－Ｅ17	ＳＤ155	(口) 9.0　(高) 4.3 (底) 3.0	外：ロクロナデ→削り出し高台 内：ロクロナデ	密	2.5Y8/1	灰白	口縁6/11	
36	013-02	陶器	小椀	Ｂ－Ｅ17	ＳＤ155	(口) 8.3　(高) 4.5 (底) 3.2	外：ロクロナデ→削り出し高台 内：ロクロナデ	密	N8/0	灰白	口縁1/2	
37	012-02	陶器	椀	Ｂ－Ｅ17	ＳＤ155	(口) 14.2　(高) 6.4 (底) 6.0	外：ロクロナデ→削り出し高台 内：ロクロナデ	やや密	2.5Y8/1	灰白	口縁5/8	永楽焼
38	010-01	陶器	鉢	Ｂ－Ｄ18	ＳＤ155	(口) 21.2　(高) 27.4 (底) 16.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地：10YR8/1 釉：2.5YR3/4	灰白 暗赤褐	口縁3/12	
39	019-01	陶器	鉢	Ｂ区	ＳＤ159	(口) 20.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地：10YR8/3 釉:10YR4/2	浅黄橙 灰黄褐	口縁6/12	
40	028-02	陶器	サヤ	Ｂ－Ｄ12	ＳＤ159	(底) 20.8	外：ロクロナデ→ヘラ切り後未調整 内：ロクロナデ	粗	10YR8/4	浅黄橙	底部3/12	
41	029-07	土師器	皿	Ｄ－Ａ10	Ｐit3	(口) 14.4 (高) 1.7	外：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ	やや密	10YR8/3	浅黄橙	口縁5/12	
42	029-08	土師器	皿	Ｄ－Ｂ9	Ｐit2	(口) 13.0 (高) 2.3	外：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ 内：ヨコナデ→ユビオサエ後ナデ	やや密	2.5Y7/1	灰白	口縁3/12	
43	030-01	土師器	皿	Ｄ－Ｃ8	Ｐit2	(口) 10.2 (高) 1.8	外：ユビオサエ 内：ユビオサエ後ナデ	やや密	2.5YR6/4 2.5Y8/2	にぶい橙 灰白	口縁5/12	
44	027-01	陶器	天目茶椀	Ｄ－Ｅ5	Ｐit1	(口) 11.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	素地:10YR8/4 釉:10YR4/2	浅黄橙 灰黄褐	口縁2/12	
45	021-01	陶器	天目茶椀	Ｂ－Ｈ15	Ｐit1	(口) 12.0　(高) 6.5 (高台)3.2	外：ロクロナデ→削り出し高台 内：ロクロナデ	密	素地：10YR8/3 釉:7.5YR4/4　10YR1.7/1	浅黄橙 褐 黒	口縁1/3　高台 ほぼ完存	
46	020-01	陶器	灰釉平椀	Ｂ－Ｂ25	Ｐit2	(口) 12.6　(高) 7.0 (底) 5.0	外：ロクロナデ→削り出し高台→糸切り痕 内：ロクロナデ	やや密	素地：10YR8/2 釉:	灰白 浅黄色	口縁3/10	
47	024-01	鉄製品		Ｄ－Ｂ10	Ｐit8							
48	028-01	陶器	甕	Ｄ－Ａ11	Ｐit1	(口) 35.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	7.5YR6/3	にぶい褐	口縁2/12	
49	022-01	瓦質土器	火鉢	Ｃ－Ｔ10	Ｐit1			やや粗	5YR7/4 10YR4/1	にぶい橙 褐灰	口縁2/12	
50	023-01	陶器	甕	Ｃ－Ｘ10	ＳＤ127・C-X10 Ｐit2	(口) 40.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	7/5YR5/1	褐灰	口縁3/12	肩部に 押印文

第７表　出土遺物観察表

Ⅴ　結語

1　遺構の変遷

大会遺跡の発掘調査では、中世から近代までの遺構を確認することができた。本報告書のまとめとして、その変遷を述べる。

(1) 第Ⅰ期（14世紀～16世紀初頭）

発掘調査で確認した17棟の建物はすべてこの時期の建物である。建物の柱穴から出土している遺物が少なく、柱穴間の切り合いも少ないため、建物の厳密な所属時期は決め難い。遺物包含層出土遺物もあわせて考えると、建物群は15世紀中葉から後葉あたりにピークが有るようである。堀立柱建物は、概ね以下の３群に分かれると考えられる。

①A群

発掘調査区の中央部から南西部にある屋敷地群。集落の中心になると考えられる。

屋敷地１　Ａ群の中心となる屋敷地である。それぞれの前後関係は不明であるが、発掘調査区の中央部には主屋ＳＢ176と付属建物ＳＢ179、主屋ＳＢ178と付属建物ＳＢ177という２つの建物群があり、南西部には主屋ＳＢ182と付属建物ＳＢ175がある。それぞれ２棟で1つの屋敷を構成している。屋敷地の北・東には柱列ＳＡ180・181がめぐる。この柱列はＳＢ176・179と方向が一致する。井戸ＳＥ82もこの屋敷地内に含まれる。

屋敷地２　やや大型の建物ＳＢ183が１棟ある。井戸ＳＥ81が屋敷地内に含まれる。区画溝などはみられない。

屋敷地３　主屋ＳＢ173と付属建物ＳＢ172が並ぶ。区画溝などはみられない。

②Ｂ群

発掘調査区の東部にある屋敷地群。Ａ群の建物群との間には谷が入る。Ａ群にあった井戸は存在しない。

堀立柱建物　５棟を確認した。桁行が５間もある２棟の細長い建物（ＳＢ185・187）が目に付く。これ以外の建物はいずれも小規模である。

③Ｃ群

調査区の北端部にある建物。確認した建物は１棟のみであるが、さらに北側に建物が存在する可能性もある。

Ａ群は、大小がセットになる建物と井戸など、生活の様子がうかがえる屋敷跡の遺構が確認できる。Ｂ群は、Ａ群とは居住者の性格が異なると思われる。

(2) 第Ⅱ期（16世紀後半から18世紀）

第Ⅰ期の建物群は遅くとも16世紀初頭に廃絶する。その後、遺構内では散在的に火葬穴が造られる。この時期の出土遺物は極端に少なく、火葬穴の所属時期も、第Ⅰ期の建物群が廃絶して以後、第Ⅲ期の耕作地が営まれる以前としか言えない。

被熱の痕跡があったり、埋土に多量の炭化物を含んでいたりして、明らかに火葬穴として認定できるものは13基であるが、周囲にある土坑の中にも、火葬穴になるものがあると思われる。発掘調査区の東隣の丘陵上には墓地があり、発掘調査で確認した火葬穴群と対になる可能性がある。

(3) 第Ⅲ期（19世紀～20世紀）

火葬穴が廃絶し、耕作地となる時期。19世紀後半の遺物がまとまって出土しているので、耕作が開始されるのは、概ねこの時期にあたると思われる。

調査区北部では緩斜面に沿って平行に走る細長い耕作溝を確認した。傾斜面を利用した茶畑の可能性がある。傾斜の変換点では耕作用と思われる水槽２基（ＳＫ60・61）を確認した。

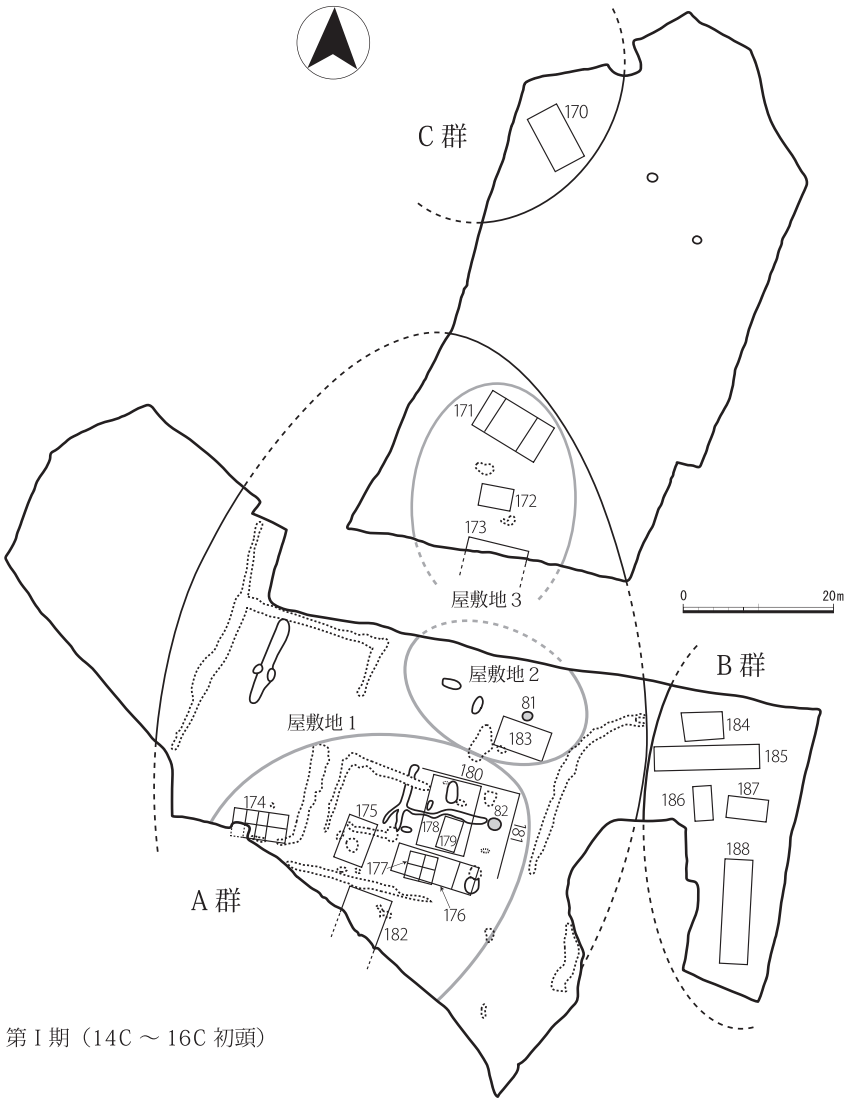
これに対し調査区南側では、区画溝が長方形にめぐり、ブロック状の畑地が広がっていたと思われる。

今回の発掘調査では、大会遺跡では14世紀から16世紀初頭にかけて集落が営まれ、16世紀後半ごろからは茶毘の場となり、19世紀には畑地となる変遷を確認することができた。

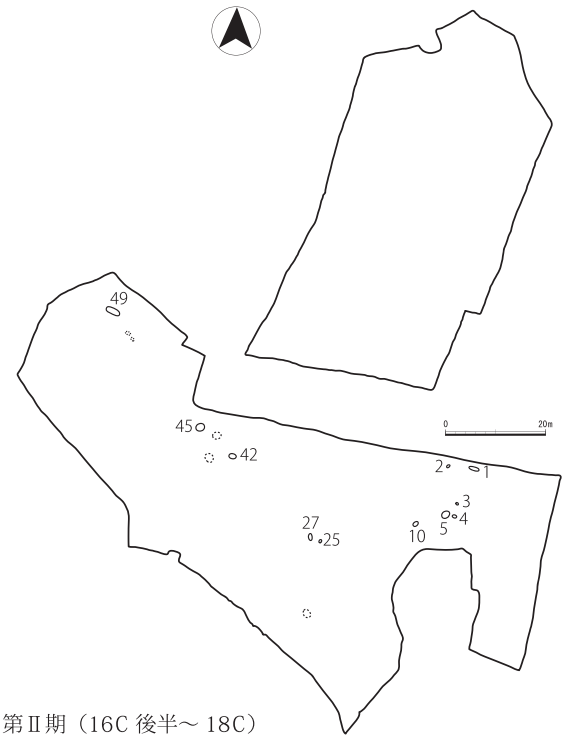
（前野謙一）

2　大会遺跡の中世集落

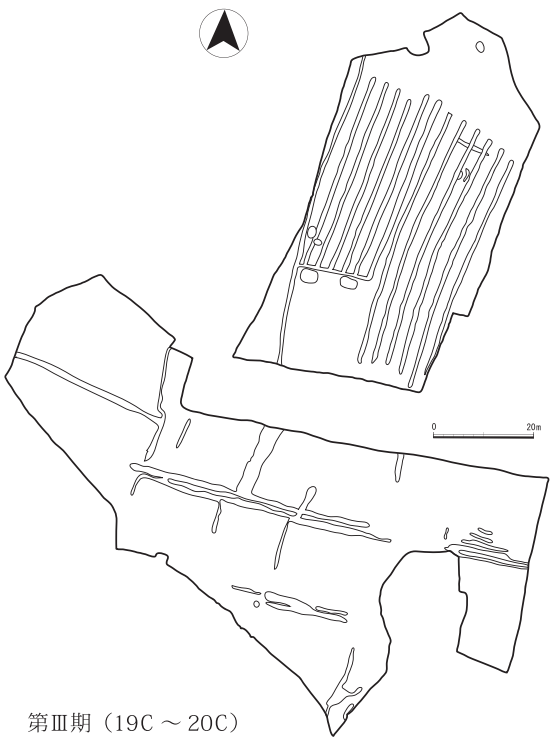
前節にて、第Ⅰ期（14世紀～16世紀初頭）の建物群について述べた。大会遺跡でのこの時期の集落はＡ～Ｃ群の屋敷地群にわかれ、Ａ群はさらに３つの屋敷地にわかれ、柵などの区画施設や井戸も備わっている。これに対してＢ群は２棟の細長い建物と小規模建物により構成される。



第Ⅰ期（14C ～ 16C 初頭）



第Ⅱ期（16C 後半～ 18C）



第Ⅲ期（19C ～ 20C）

第22図　遺構変遷模式図

Ｂ群の建物の性格については、すでに概報で「畜舎」を中心とする建物群との解釈が行われ、「牛・馬飼い集団」の存在が想定されている[①]。

たしかにＡ群とＢ群では井戸や区画施設の有無、遺構密度などにかなりの差異があり、同時存在のものであるならば、建物群の性格はかなり異なるものであるといえよう。

しかし、Ｂ群の建物群をその平面形態から「畜舎」とするには検討の余地があると思われる。これについては、同時期の堀立柱建物の遺構、遺跡内での位置などを総合的に検討し、その性格を考察していく必要がある。

三重県内の中世集落は、12世紀から13世紀には多く確認でいるものの、14世紀には激減し、ほとんど確認できなくなる。そういった中で、丘陵上の大会遺跡で集落が確認できるということは、当該時期の集落の様相を明らかにする上で意義があると考えられる。

（竹田憲治）

3　中世陶器の搬入状況

大会遺跡と同じ亀山市内の三寺遺跡群[②]では、瀬戸美濃製品と常滑製品の破片数の計測を行い、中世陶器の集落への搬入状況が明らかにされている。本報告書でも同様の手法を用い、大会遺跡への中世陶器の搬入状況を考察したい。

(1) 瀬戸美濃製品

瀬戸美濃製品については全点の破片を計測した。器種名・型式と編年は藤澤良祐氏による。

その結果を示したものが、第23図である。全破片数は37点である。このうち型式が確実なものを「確定」と表現し、所属型式に幅があるものについては、可能性があるそれぞれの型式に等比配分を行った上、「案文」と表現した。

出土した瀬戸美濃製品のうち、古瀬戸中期のものが１点みられる。ただしこの１点の器種は不明で、詳細もわからない。伝世品である可能性もある。

大会遺跡で安定的に瀬戸美濃製品が搬入されるのは古瀬戸後Ⅱ期（14世紀後葉から15世紀第１四半期頃）からである。その後、出土量は後Ⅲ期（15世紀第２四半世期頃）にピークを迎え、後Ⅳ期古段階（15世紀第３四半期頃）に減少し、その後は搬入されなくなる。

(2) 常滑製品

常滑製品については口縁部の破片を抽出し、口縁部1／12を１として集計を行った。器種名、型式・編年は中野晴久氏による。

その結果を示したものが、同じく第23図である。このうち型式が確実なものを「確定」と表現し、所属型式に幅があるものについては、可能性があるそれぞれの型式に等比配分を行った上、「案文」として表現した。

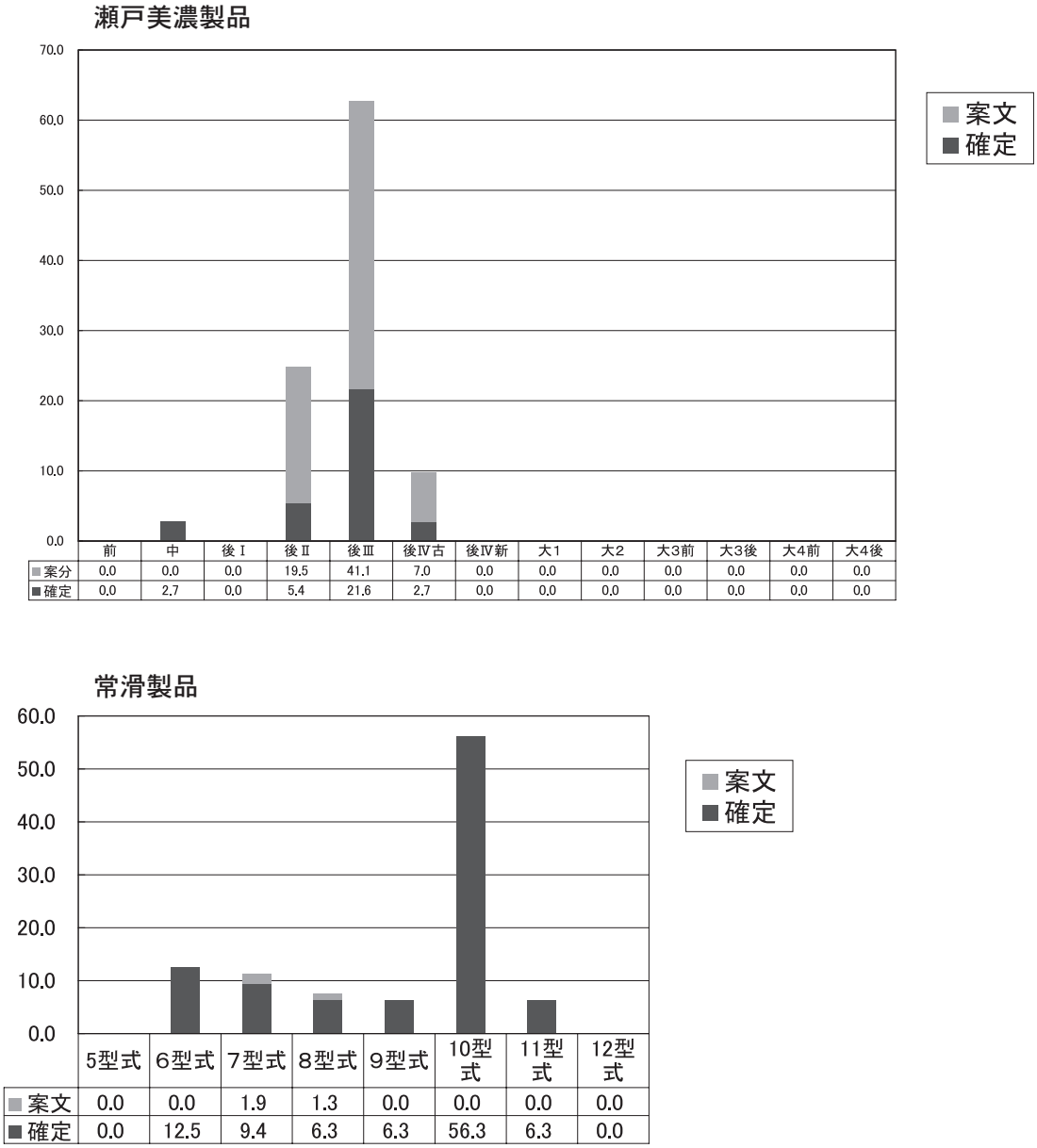
常滑製品は第６型式（13世紀後半）から安定して搬入される。最も多く搬入されているのは第10型式（15世紀後半）で、その後第11形式（16世紀前半）まで搬入される。

以上、大会遺跡への瀬戸美濃製品と常滑製品の搬入状況をみてきたが、瀬戸美濃製品が15世紀中葉以降に搬入されなくなるのに対し、常滑製品は15世紀後半に搬入のピークを迎えることが最大の特徴である。同様の傾向は三寺遺跡群でもみられ、旧鈴鹿郡に共通する搬入状況である可能性がある。

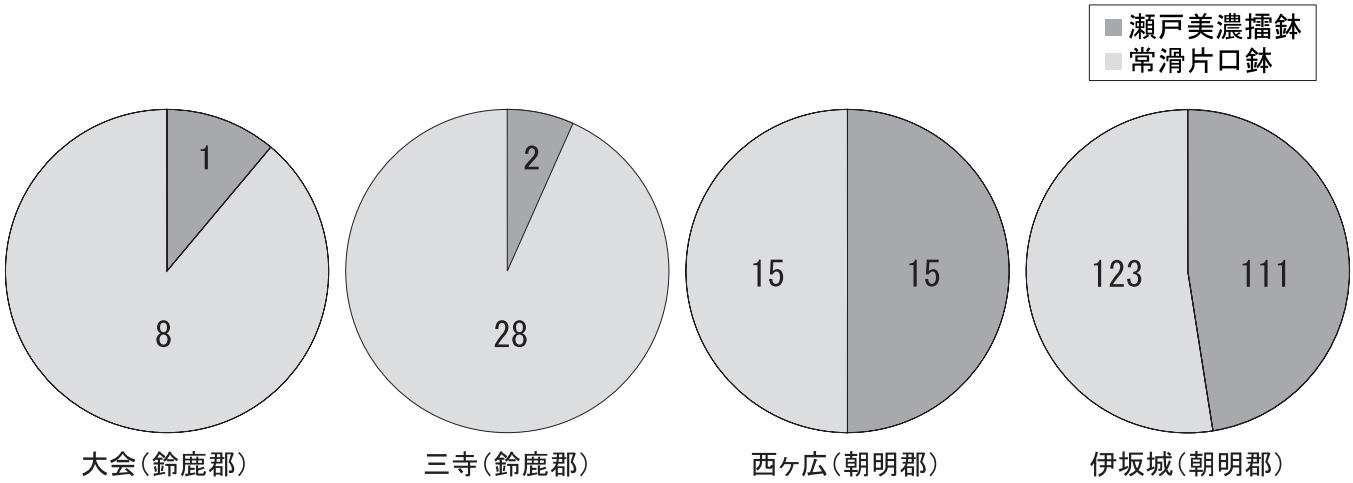
第24図は北伊勢各地の中世遺跡から出土した陶器のうち、瀬戸美濃製品の擂鉢と常滑製品の片口鉢の比率を示したものである。伊坂城跡[③]・西ヶ広遺跡[④]は旧朝明郡（現四日市市）、大会遺跡・三寺遺跡群は旧鈴鹿郡（現亀山市）にある遺跡である。遺跡の時期は伊坂城跡が16世紀前半から末であるが、それ以外の３遺跡は概ね15世紀から16世紀初頭頃である。

それぞれの図を比較すると、四日市市域の２つの遺跡では瀬戸美濃擂鉢と常滑片口鉢の比率が拮抗するのに対し、亀山市域の２つの遺跡では常滑片口鉢が瀬戸美濃擂鉢を圧倒する。これは主として生産地からの距離に起因すると思われる。これが瀬戸美濃製品と常滑製品の搬入量の推移と相関関係にある可能性がある。

（竹田憲治）



第23図　大会遺跡出土中世陶器グラフ



第24図　中世遺跡出土の瀬戸美濃擂鉢と常滑片口鉢の割合

4　総括

大会遺跡では、14世紀から集落が営まれ始める。集落は15世紀中葉から後葉にピークを迎えながら、16世紀初頭まで存続する。この時期の集落は主屋と付属建物の２棟が対になる建物群と、細長い建物と小型建物からなる建物群に分かれる。建物群の間には浅い谷があり、２つの建物群には性格差があることが推測できる。後者の細長い建物を「畜舎」とみる指摘もあるが、それについては、さらに慎重な検討が必要である。

いずれにしても三重県下では14世紀の集落跡は類例が少なく、中世後期の集落構造を考える上で本遺跡は重要な事例となる。

大会遺跡出土遺物では瀬戸美濃製品と常滑製品の搬入状況の時期・器種により変化する可能性を提示することができる。この問題についてはさらに資料を増やし、河川流域単位あるいは郡単位で搬入の状況を示していく必要がある。

遺物単体では、南伊勢系の羽釜（３）と、京焼の椀（37）がある。前者は中北勢系土師器羽釜の成立に影響を与えた様式である可能性があり、後者は、幕末から明治期の農村への高級陶器の浸透を考える上で大きな意味がある。

（竹田憲治）

註

①『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）亀山東JCT～滋賀県境　埋蔵文化財発掘調査報告概報Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター　1999年

②『三寺地内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2006年

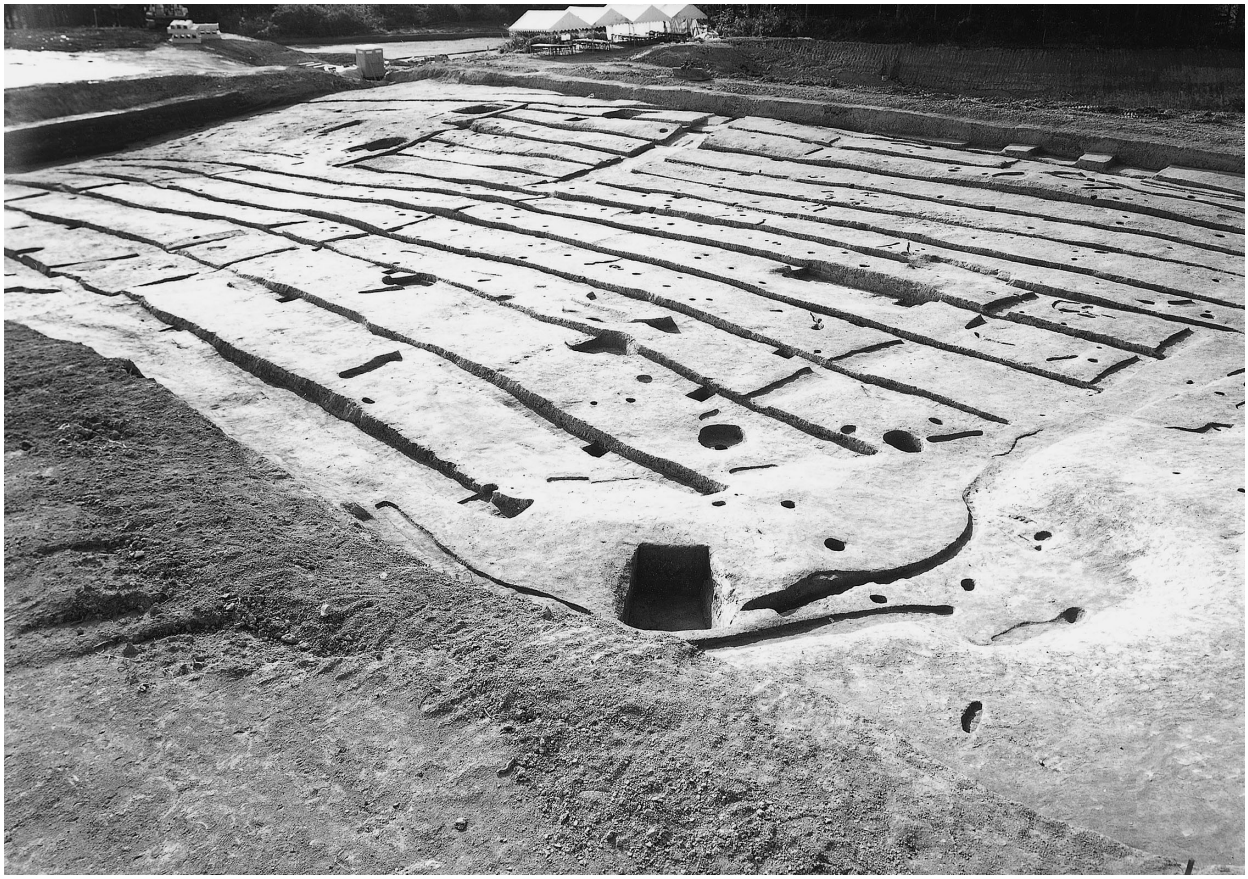
③『伊坂城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2003年

④『西ヶ広遺跡（第３・４次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2006年

調査前状況・Ｂ区北方　南から

Ｄ区東南部表土剥ぎ　東から

図版２



Ｂ区全景　北東から

Ｂ区全景　北から

Ｃ区東部全景　東から

Ｃ区東部全景　北から

図版４

Ｄ区全景　北西から

Ｄ区北西部全景　南西から

図版５

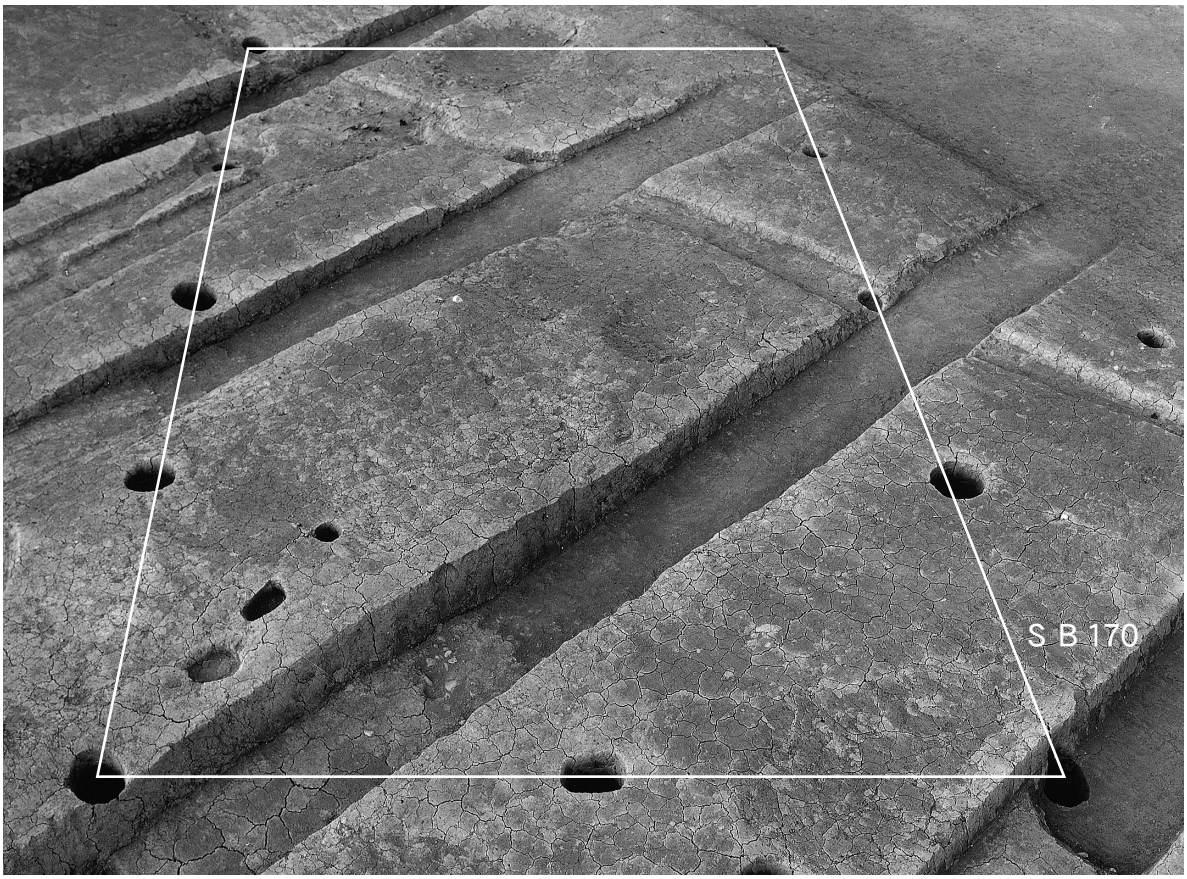
Ｄ区西南部　北東から

Ｃ区北東部　南から

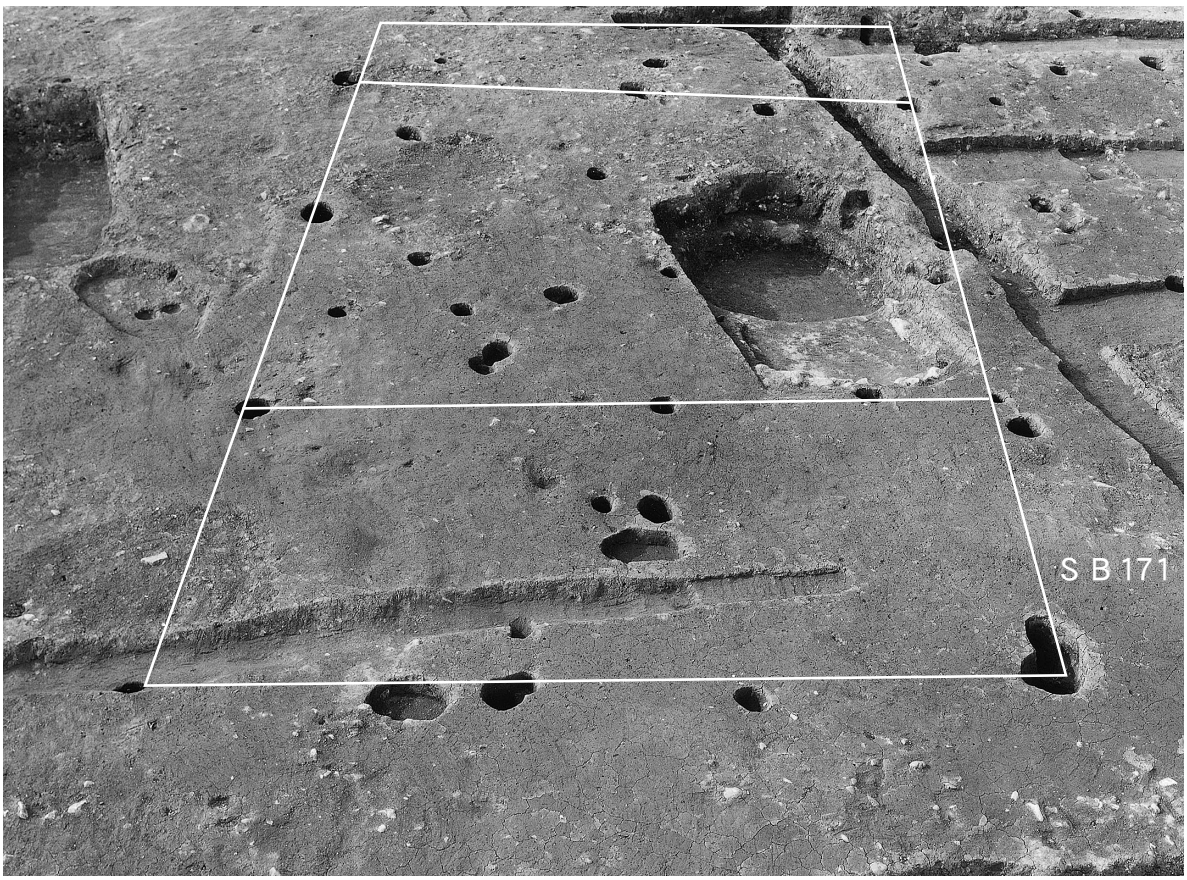
図版６

Ｃ区南東部Ｄ区南西部遺構群　西から

Ｄ区西南部　北西から

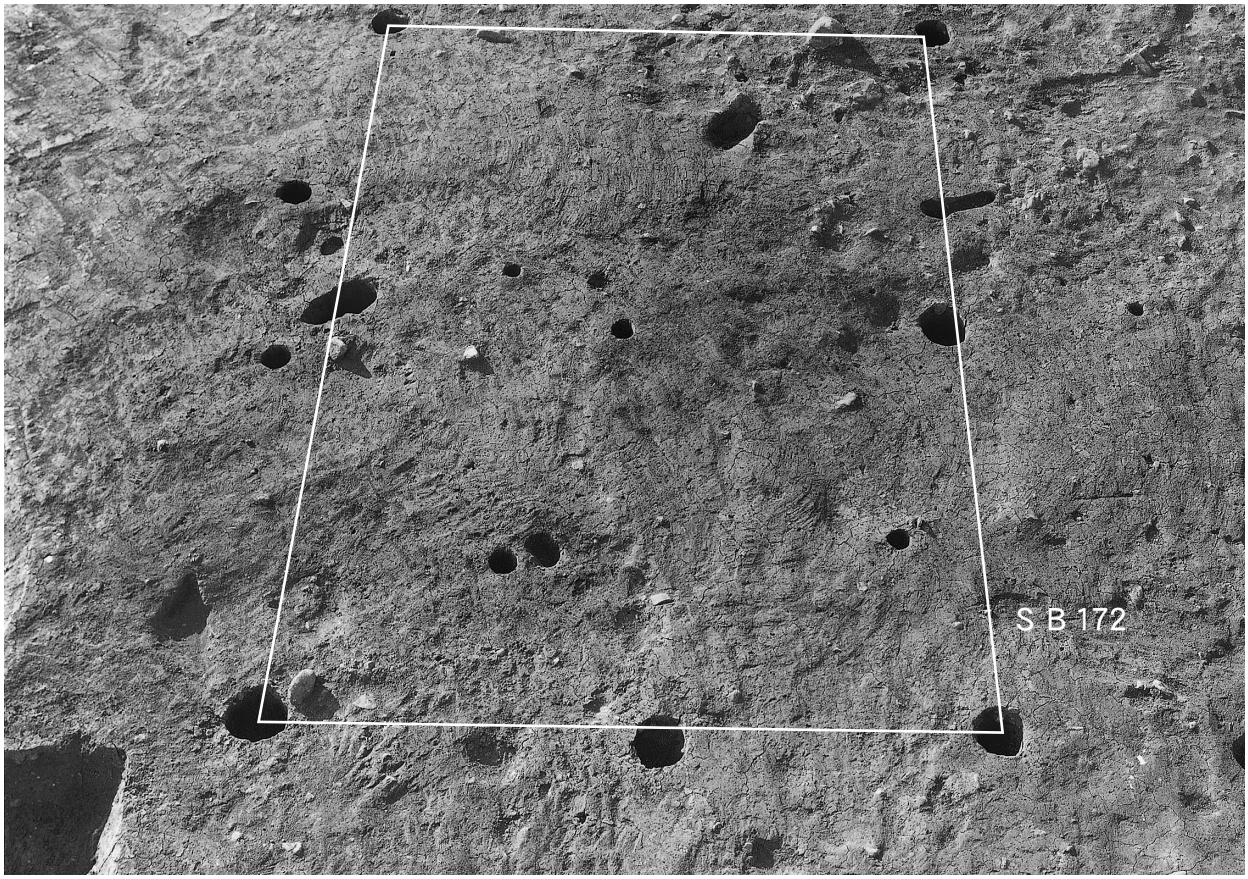


ＳＢ170　南東から

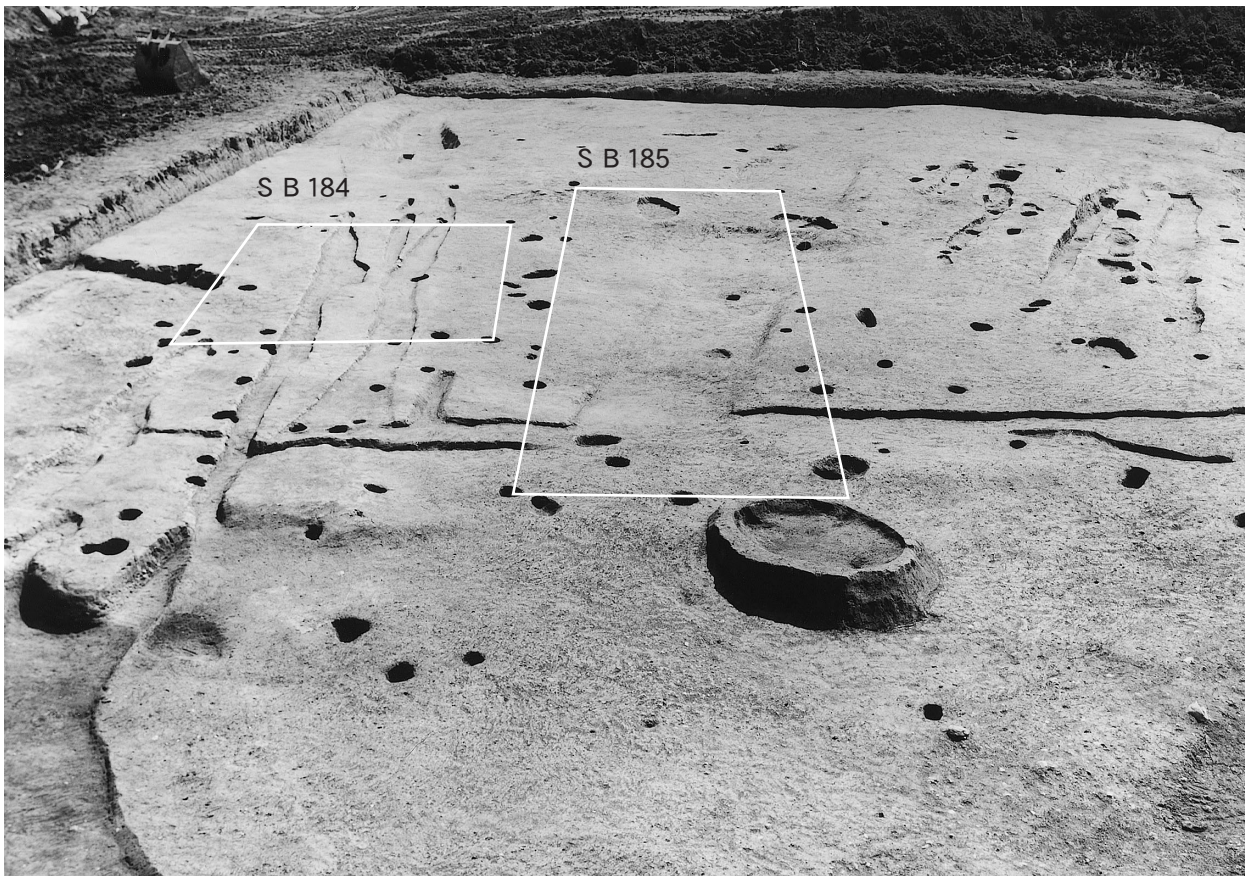


ＳＢ171　東から

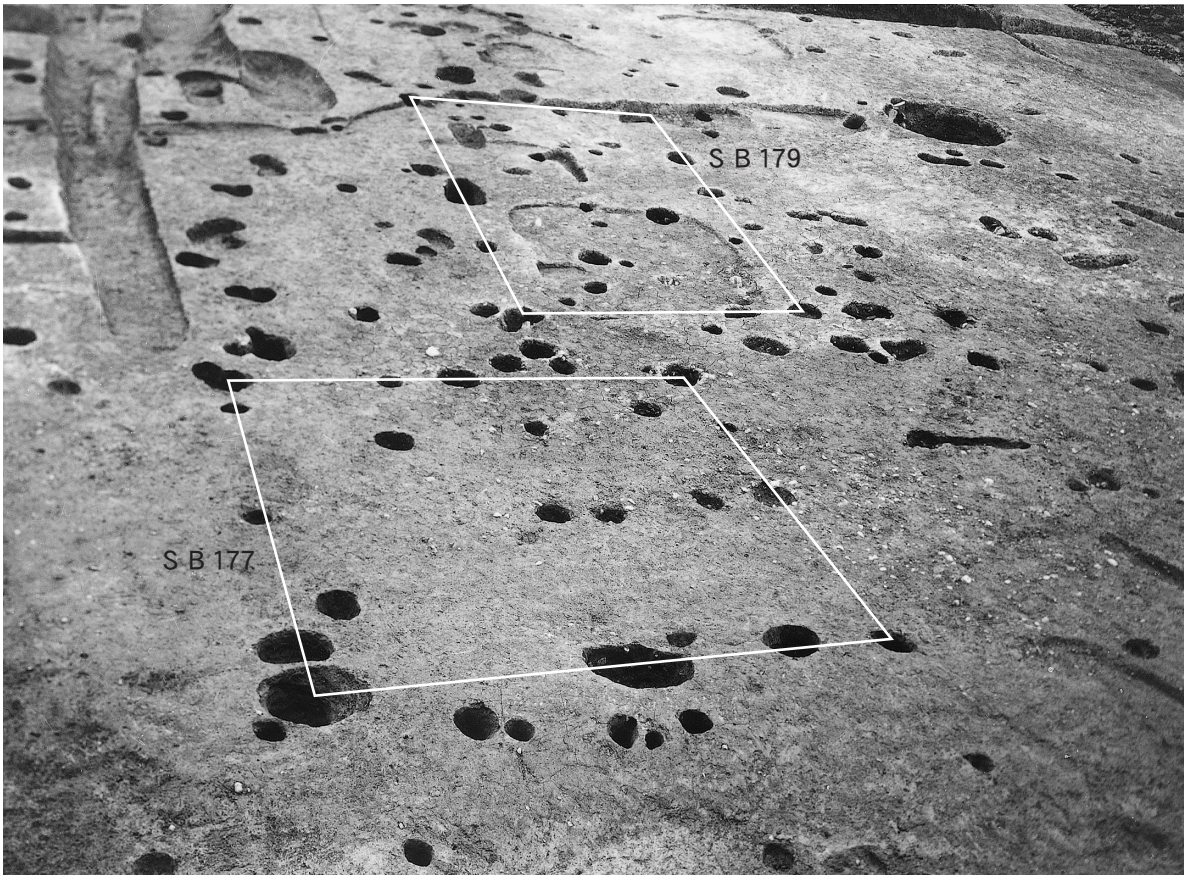
図版８



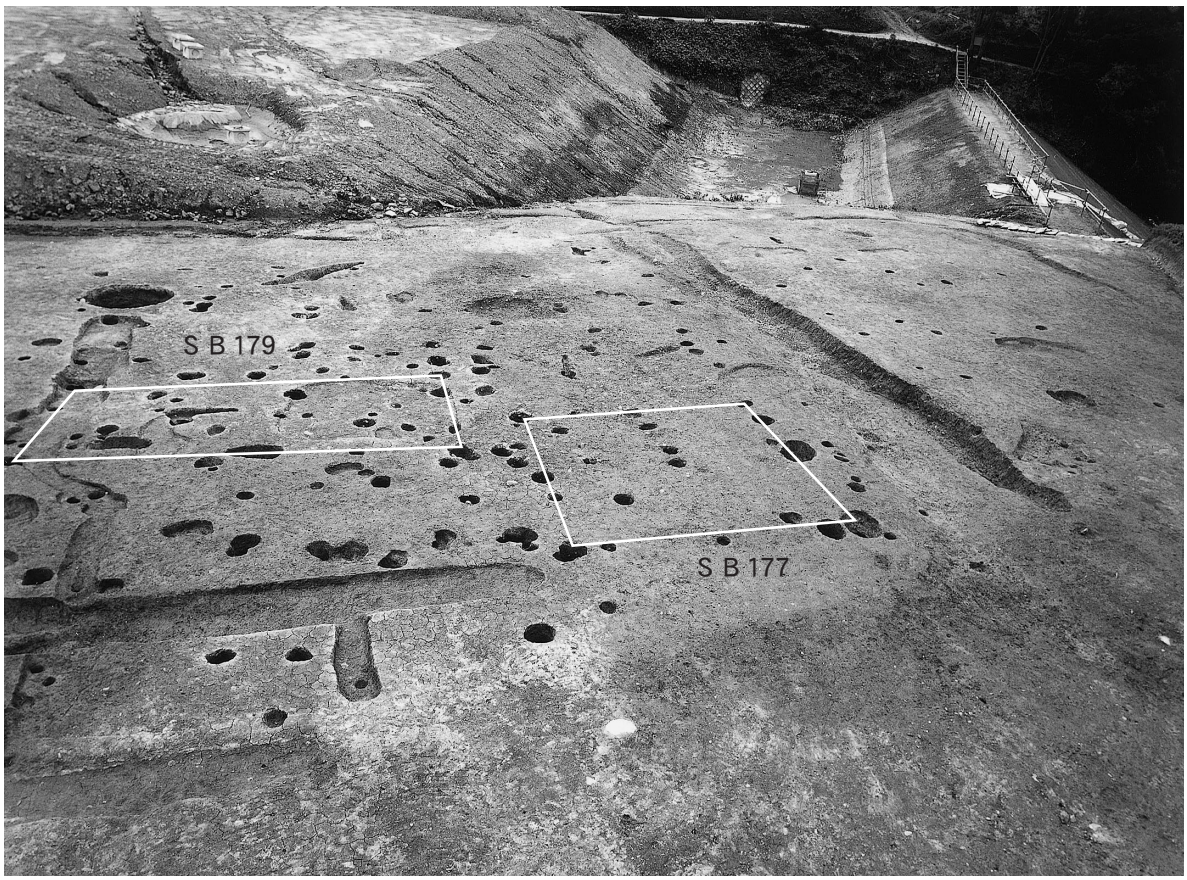
ＳＢ172　東から



ＳＢ184・ＳＢ185　西から



ＳＢ177・ＳＢ179　南西から



ＳＢ177・ＳＢ179　西から

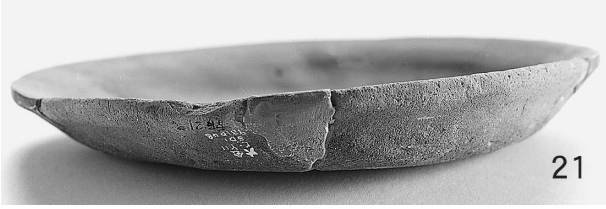
図版10

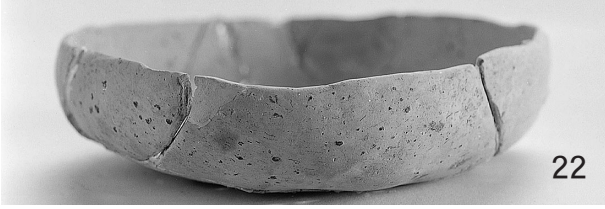
現在の大会遺跡　南東から

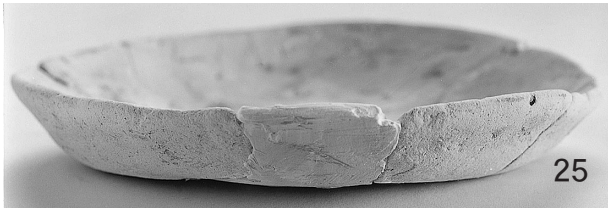
現地説明会風景

出土遺物①

図版12







出土遺物②

報告書抄録

ふ り が な	えいげいせき　はっくつちょうさほうこく
書　　名	大会遺跡発掘調査報告
副　書　名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２７８
編　著　者　名	竹田憲治、前野謙一、森川幸雄
編　集　機　関	三重県埋蔵文化財センター
所　　在　　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川 503　TEL0596-52-1732
発 行 年 月 日	西暦　2007 年　3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
えいげいせき 大会遺跡	みえけんかめやまし 三重県亀山市 ふたおちょうあざえいげ 両尾町字大会	市町村 ２４２１０ 遺跡番号	35° 54′ 04~06″	136° 26′ 17~20″	1998 年 8 月 3 日 ～ 1998 年 12 月 9 日	6,804 ㎡	近畿自動車道名古屋神戸線 （第二名神）

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
大会遺跡		中世 ～ 近世	掘立柱建物　17 棟 柱列　2 棟 土坑　54 坑 火葬墓　13 基 溝　65 条 井戸　2 基	磨製石斧、山茶椀 土師器（皿、鍋、羽釜等） 陶器類（常滑大甕、信楽急須、美濃瓶等） 染付、白磁、陶磁器	12 代目永楽善五郎作の京焼出土

要約

亀山市安楽川左岸の丘陵上で、中世から近代までの遺跡を確認した。14 世紀後半からはじまり 15 世紀中葉から後葉を中心とした中世集落跡では、主屋と付属建物、細長い建物と小型建物などを含め合計 17 棟の堀立柱建物を確認した。出土遺物は、南伊勢系の羽釜・瀬戸美濃製品の灰釉平椀・常滑製品の甕・土師器皿・山茶椀・磨製石斧・幕末の陶器椀（京焼）などである。14 世紀の集落跡は類例が少なく、中世後期の集落構造を考える上で重要な遺跡である。

三重県埋蔵文化財調査報告　278

大会（えいげ）遺跡発掘調査報告

2007（平成19）年３月

編集発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲　山　文　印　刷